



桑折学の すすめ

郷土愛を育むために

桑折学のすすめ

郷土愛を育むために

桑折地区

歩いて楽しめる

地域づくり懇談会

桑折学部会 編著

桑折学のすすめ

（郷土愛を育むために）

桑折地区歩いて楽しむ地域づくり懇談会
桑折学部会 編著

『桑折学のすすめ　く郷土愛を育むために』の発刊に寄せて

桑折の町づくりの集会に何度か参加し、またその一環として編まれている桑折学の準備もつぶさに拝見する機会を得て、あらためて町づくりとは何か、を考えさせられた。

町づくりとはきわめて個性的な営みであつて、同じものはふたつとなく、なかなか一般論でかたづくものではない。下手な一般理論よりも、町ごとの詳しい物語りこそたよりになるのだ。理論もさることながら、人々の想像力を刺激し、人々を奮いたたせる魂の泉が欠かせないからだ。これを歴史にたとえれば、古代から現代まで時間を追って書き連ねる通史のほかに、血沸き肉踊る英雄の行いを事細かに描いた列伝が不可欠なの似ている。

この小冊子は数多い町づくりの英雄列伝のひとつとして輝くに違いない、とおもう。

さて、その市民の営為を天地人三才の町づくりと要約してみた。そのころは次のようである。先ず、天の気。さわやかな環境のなかで四季の循環が鮮やかに感じられる町。次に、地の気。この世に二つとないふるさとはそれぞれの地霊がすむという。それはその町に固有の地相を住処とし、歴史を舞台として現れるであらう。そして、人の気。これは何よりも市民

の打ち解けた社交的な雰囲気、活発な生きがい、働きがい、そして何よりも自治の気迫である。

自治といえば、「自治を離れて楽土はない」と言い放った後藤新平はまた、こう言ったという。自治生活の要義は、国民各自の公共的精神を徐々に養い育て、広め、一致団結、それによって相互協力の美風をふるいおこすことである、と。

後藤が期待したのは、さまざまな市民が、一日の仕事を終えた夕方より、三々五々あつまって放論談笑の間に、各自の生活、気分を相互に理解し合うことであり、そのために会館を建てたのであった。このようにして、外来の民主思想はほんものの内生思想になるという。

いま桑折で起こっているのはまさに、後藤が願った市民自治の発露ではないだろうか。地方主権時代の幕が開ける。その先頭を走っていただきたい。

桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会

「桑折学」部会アドバイザー

東京工業大学名誉教授 中村良夫

はじめに

豊かさとは何か、幸せとは何か――。

こうした価値観についての定義は、人によって異なるのはもちろん、日々の暮らしの中で刻々と変わっていきます。さらに、次の世代へと時代が移っていけば、あらためて定義づけられ、あるいは新たな価値観が生みだされていくものです。

私たちが暮らすこの桑折には、悠久の昔から豊かな自然があり、その環境を舞台に多くの人々の暮らしの営みが積み重ねられてきました。この郷土の歴史から多くを学び、未来へ向けた豊かさや幸福を見いだし、子どもたちに伝えていくことが、今ここに暮らすわたしたちがなすべきことのひとつではないでしょうか。

つまり郷土学とは、単に郷土の歴史や魅力を知ることだけではなく、それらを通して郷土愛を育み、郷土のために行動することも含まれるのです。

さらに、郷土学を学ぶには、家族や地域の人々との連携や協力が不可欠で、その過程において家族の絆が深まり、地域のコミュニケーションも強まることでしょう。

桑折学部会では、桑折固有の自然や歴史、魅力を見いだし光を当てること、

また、それをこれからのまちづくりに活かすことを目的として、「桑折学のすすめ」をまとめました。

「桑折学のすすめ」は、桑折の郷土学の入り口であり、未来のまちづくりへの手がかりのひとつです。この小冊子をもとに、すべての桑折町民が郷土に対する誇りを育みながら、まちづくりへの共通認識と理解を深め、潜在するパワーを発揮し、豊かさや幸せを感じられる桑折をつくっていくこと、それが「桑折学」の役割です。

平成二十二年二月

桑折地区歩いて楽しむ地域づくり懇談会

「桑折学」部会 部会長 渡邊信夫

『桑折学のすすめ』郷土愛を育むために』の発刊に寄せて

はじめに 4

1 桑折町の自然と古代から続く営み 9

1 桑折町の地形・地質 10

2 桑折から始まる福島県の古代文明 12

3 地形から見た古道と平成に続く交通路 14

4 古代から続く「こおり」の名 15

2 伊達家・上杉家・幕領と桑折の発展 17

5 伊達家の国づくり 18

6 上杉氏と桑折の繁栄 21

7 幕府直轄領としての桑折 22

8 戊辰戦争 24

9 桑折藩と桑折県の誕生 25

3 半田銀山 千百年の栄枯盛衰 27

10 半田銀山 28

11 半田銀山の歴史と経営者の変遷 28

12 半田銀山のもたらした文化・経済 31

13	半田銀山の遺跡	32
14	半田山自然公園物語	36
4	街道と舟運を活かした桑折宿	39
15	奥州街道と羽州街道	40
16	桑折宿	42
17	阿武隈川舟運	46
18	街道や舟運がもたらした江戸文化	50
5	土木遺産 西根堰と水路網の魅力	51
19	西根堰	52
20	まちなかの水路	58
6	旧伊達郡役所と桑折の近代化	59
21	旧伊達郡役所	60
22	養蚕	61
23	蔵の町桑折	64
24	べこ市場	64
25	三元車	66
26	桑折駅物語	67
27	桑折三方道路	71
28	桑折温泉と温泉通り	72

7 桑折を愛した人々

29 桑折をつくってきた人々

73

30 桑折に江戸文化を花開かせた人々

83

31 「葛の松原」を詠み継いできた人々

90

8 暮らしの知恵と文化・風習

93

32 蚕業から果樹へ

94

33 王林と献上桃

95

34 万正寺の大力ヤ

96

35 桑折のむかしはなしと民話

97

36 食文化

98

37 祭りと行事

99

38 地名・字名

102

39 学校

104

40 まちづくりへの新たな取り組み

107

桑折町と西根堰流路図

113

桑折町中心部地図

115

「桑折学」年表

117

資料

122

桑折町の自然と
古代からの続く営み

ハートレイク・半田沼





桑折を貫く道路・鉄道・河川

1 桑折町の地形・地質

半田山^{はんたやま}から桑折町を見下ろすと、四本の太い線が見えます。手前から、東北自動車道、東北新幹線^{しんかんせん}（東北本線）、国道四号、そして阿武隈川^{あぶくまがわ}です。昔は奥州街道^{おくしゅうかいだう}と羽州街道^{うしゅうかいだう}が通り、今も重要な交通路として道路や鉄道が通っています。道は人や文化、物を、川は水や肥沃^{よく}な土、米などの物資を運びました。

桑折町は、西に奥羽山脈^{おうう}、東に阿武隈高地と、周囲に山々がせまる福島盆地^{ふくしま}にあり、その中を阿武隈川^{あぶくまがわ}が蛇行^{だこう}しながら流れています。

山地

桑折町の北西側には、半田山を最高峰とする山地が広がっています。半田山は、その高さの特徴的な姿^{すがた}により、古くから地域のシンボルとして親しまれています。それに連なり、黒山、七ツ森、平沢山などの山並みが見られます。町内の標高差は、阿武隈川から半田山まで、八〇〇メートル以上もあります。

山地と扇状地^{せんじょうち}の境^{さかい}には桑折断層^{さんせつだんそう}があり、盛り上がった地形から、山地ができるときの動きに大きく関わったものとみられています。

半田山 標高八六三・一メートル
黒山 標高五九五・〇メートル
七ツ森 標高五九〇・〇メートル
平沢山 標高四三三・〇メートル
断層 地層のズレ。地球の表面にある岩の層が動くときに生じた力によって切断されているもの。

1 桑折町の自然と古代から続く営み

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----



かつての流路の跡がわかる阿武隈川

扇状地 河川が山地から低地へ移り流れが緩やかになった所に土砂などが積もってできた扇形の地形。
氾濫原 洪水のときには河川からあふれた水に表面をおおわれてしまう範囲にあたる平らな土地。

阿武隈川 幹川延長二二九キロメートル。「大言海」によれば、「くま」の意味は、「曲り入り、隠れて見えぬところ、道にも川にも云う」とある。阿武隈川という名も、そのような蛇行する様からつけられたとも考えられる。

扇状地

桑折町の多くは、町の中心部を流れる産ヶ沢川を中心を広がる扇状地や、半田山からの水が注がれる佐久間川、普蔵川が形成した小さな扇状地の上に展開されています。この扇状地の中央には、西根堰の水路が南北方向へ弓なりに伸びています。

氾濫原と河岸段丘

桑折町の東側を流れる阿武隈川は、堆積や浸食を繰り返すことにより、河岸段丘という階段状の地形を造りだしました。阿武隈川の河口から約六五キロメートルの地点にある桑折町では、南町庫場から根岸、下郡にかけて河岸段丘の崖地が見られます。

また、阿武隈川沿川の耕地の形状からは、かつて氾濫源で自由に蛇行していた様子を読みとることができます。

阿武隈川の氾濫は多くの災害をもたらしましたが、上流から新たな土砂が流れ出し堆積することによって土地は肥え、作物がよくできるようになりました。

なかでも伊達崎地区は、その恩恵を受け、農作物生産に適した地となりました。

1 桑折町の自然と古代から続く営み

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



上空から見た桑折

桑折層 鈴木敬治 「古植物生態学の諸問題―天王寺植物化石群とその古植物生態学的研究」『地団研専報 九』（一九五九）による。
礫質砂岩 小石の混ざった岩石。
凝灰岩 火山灰がかたまった岩石。

地質

桑折町の表層地質の多くは、長い年月のなかでいくつかの河川によつて運ばれ堆積してきたものです。その下には、今から一千万年前ごろに福島盆地周辺に広がっていた海で作られた、二百メートルを超える厚さの海底堆積物による地層があり、桑折層と名づけられています。礫質砂岩や凝灰岩の桑折層からは、イタヤガイ科の仲間やホタルガイ科の仲間など、二枚貝や巻貝の化石が多く発見されています。

また、産ヶ沢川流域の桑折温泉うぶかの郷付近には、一千六百万年前の火山噴出物の層がみられます。なお、半田山周辺で採掘されていた金銀の鉱石床は、主に火山活動に伴う熱水によつて変質してできたものと考えられています。

2 桑折から始まる福島県の古代文明

三万年前 旧石器時代の桑折

桑折町には、東北自動車道建設のときに発見された平林遺跡と古矢館遺跡（南半田）があり、県内有数の石器が出土し、福島県内で最も古い獲物を解体する道具として福島県立博物館に収蔵されている。

1 桑折町の自然と古代から続く営み

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----



薩摩遺跡出土の土偶



平林遺跡出土の石器

ます。福島県の古代文明遺跡は、桑折から始まっているのです。

一万二千年前～二十四百年前（縄文時代）

桑折町では、林泉寺前遺跡など一〇の縄文時代中期の遺跡が発掘されています。これらは、阿武隈川に面した段丘の東南縁辺部に多く見つかっています。縄文時代後期の遺跡は少なく、二本木遺跡、薩摩遺跡（南半田二本木）がある程度です。これらの遺跡は、山麓のゆるい起伏のある台地が発達した地域に多く分布しています。

二千年前～三世紀頃（弥生時代）

桑折町内には、弥生時代の遺跡として蝦夷塚遺跡、三反田遺跡、町裏遺跡があり、そのほか、薩摩・二本木遺跡からも少量の弥生土器が発見されています。これらの四遺跡は、いずれも阿武隈川の氾濫を避けて、一段上の段丘にあたる標高七〇～一〇〇メートルに立地しています。このことから、桑折町内においても、紀元前二世紀ごろには、水田による稲作が開始されたと考えられています。

三世紀後半～六世紀末頃（古墳時代）

このころには複数の集団で定住するようになり、村ができました。

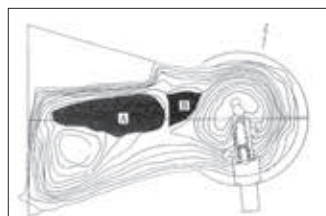
1 桑折町の自然と古代から続く営み

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

伊達崎錦木塚古墳



前方後円墳の錦木塚古墳



錦木塚古墳全体図

A：後世の盛土 B：後世の削平

桑折町内の遺跡 『福島県遺跡地図』（福島県教育委員会 一九九六年）には、桑折町内九五遺跡が掲載されている。薩摩・二本木遺跡 縄文時代後期の二本松遺跡、薩摩遺跡は接続しており、一つの遺跡とみられている。

その中で力の強い者が村を治めるようになり、地域の小国家ができあがりました。こうして階級社会が成立していったのです。

五世紀中ごろ、伊達崎塚野目古墳群は、桑折町から国見町にかけての広大な段丘上に、福島盆地最大の古墳群として造営され続けたと考えられています。

六世紀の造営といわれるのが、錦木塚古墳です。全長四三メートルの前方後円墳であり、下の低地から見上げるような場所に築かれ、それ以前の古墳とは異なる立地となっています。これらは階級社会における権力者の墳墓で、鉄剣、銅腕などが出土しています。

3 地形から見た古道と平成に続く交通路

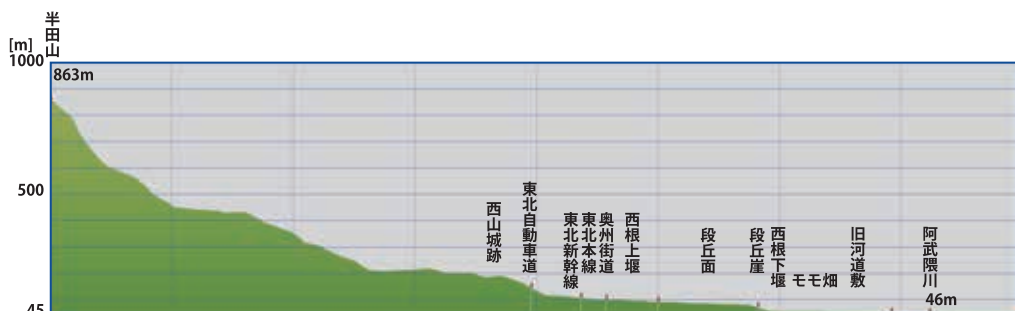
古代より、桑折を通過する主要な交通路は、西側の半田山をはじめとする小起伏の山地を巻くようにして、山麓と扇状地の境をほぼ南北に通っています。

東山道は、律令国家の時代に東北地方の蝦夷に備えるため、また、献上物の輸送を管理する公使・管理の役人が使うための道として整備されました。東山道は、今の桑折町を通過していました。

桑折が上杉氏の領地だった慶長七年（一六〇二）、伝馬制度が設け

1 桑折町の自然と古代から続く営み

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



半田山から阿武隈川に至る桑折の断面模式図

られ、一里塚が整備されました。桑折周辺の奥州街道・羽州街道でも一里塚が整備されています。

現在の主要な交通路も、山地から平地へ地形が変化する境界部分をうまく利用しており、国道四号や東北自動車道、東北新幹線、東北本線が集中的に南北に整備されています。

このように、古代から現代へと続く東北地方の主要な交通路は、桑折町のごく限られた範囲はんいを通じていました。これは桑折町固有の地形的な構造こうぞうに起因きいんしているものと考えられます。

4 古代から続く「こおり」の名

「桑折」の地名の発祥は、上郡・下郡かみごおり・しもごおりとともに、その起源は古代までさかのぼるほど古いといわれています。上郡・下郡は、古代の郡役所を意味する「郡家」が語源といわれています。郡家は、「こおりや」「ぐんけ」などと読みます。

また、「桑折」の字が当てられたのは、桑折中央部の字名に桑島くわじまがあることから、その一字が使われたともいわれていますが、実際のところはよくわかっていません。

1 桑折町の自然と古代から続く営み

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

桜に縁取られる半田沼



産ヶ沢上流の藁田淵



伊達家・上杉家・
幕領と桑折の発展

西山城跡（左から東郭・本丸・二ノ丸・中館）



大墓公阿弓流為と磐具公母礼 延暦

二〇年（八〇二）、桓武天皇は陸奥国

を統一しようとアテルイと戦っていた

がたびたび敗れていた。戦は長年に

わたり、食糧不足などの理由からア

テルイはモレとともに征夷大將軍

坂上田村麻呂に降伏する。田村麻呂は

アテルイたちの命を助けようと朝廷に

進言したが、朝廷は許さずアテルイと

モレを斬ってしまった。なお、桑折町

観音寺には、田村麻呂の戦いを描いた

江戸時代の絵馬が残っている。このこ

ろ、桑折に赤頭太郎がいた（74ページ

参照）。

信夫佐藤氏 信夫佐藤氏は、平泉の奥

州藤原氏の血を引く同族であり、飯坂

に大鳥城を構えて信夫郡を治めると

もに、藤原氏の莊園を管理していた。

佐藤基治とその子息の忠信・継信の墓

が福島市の医王寺にある。

伊達政宗 伊達氏には、九代政宗と仙

台藩を築いた十七代政宗の二人の政宗

がいる。

5 伊達家の国づくり

平安時代末期、信夫・伊達両郡は、平泉文化を築いた平家の奥州

藤原氏と先住豪族大鳥城主信夫佐藤氏の領地でした。

文治五年（一一八九）、鎌倉政権の統一をはかるため、源頼朝

と常陸入道念西（伊達朝宗）は、源平の奥州合戦で藤原氏を滅ぼし

ました。頼朝に仕えて戦った朝宗一族は、頼朝の命により常陸国

（茨城県）から国替えし、伊達郡の中心地桑折を本拠地として、伊達

家が誕生しました。

桑折に入部した伊達氏の初代朝宗は、頼朝から与えられた瓦を使っ

て立派な寺を建てました（満勝寺）。その後も、桑折を中心とした地

域に城を構え、その代表的なものが九代政宗の赤館であり、十四代

植宗の西山城です。満勝寺の跡は、朝宗の墓所となっています。

天文元年（一五三二）、十四代植宗は西山城に移り、陸奥国守護職

にふさわしい本格的な城郭整備を行いました。植宗こそが戦国大名

としての伊達氏の地位を確立させた人であり、著名な施策はこの西

山城で行われました。当時の伊達氏の所領は東北地方の南半分にも

2 伊達家・上杉家・幕領と桑折の発展

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----



伊達朝宗墓所

塵芥集 戦国時代に戦国大名が領国内の統治のために制定した分国法の代表のひとつ。西山城にて制定され、一七一条からなる分国法中最大規模のもの。次に、そのいくつかを例示的に示す。

・届出なしの処罰禁止(私成敗の禁止)

および、西山城はその中心として存在していました。

西山城は、東西〇・八キロメートル、南北一・五キロメートルの規模を有する複郭式平山城であり、産ヶ沢川が天然の外堀となり、城を囲んでいます。西山城は現在の桑折町の中心部のすぐ西側の小高い山(標高一九三メートル)の上にあり、まちなかや阿武隈川方面を見渡すことができる格好の場所に位置しています。

城は、本丸・二ノ丸・東郭・砲台場郭・馬出郭からなり、それだけでも独立した山城といえるもので、さらに周辺に中館・西館・常陸館・蔵人館などの城館を配置した大規模なものでした。

また、伊達崎館・弁慶館・文吾館・左衛門館など、家臣や地頭領主のものとされる数多くの城館が阿武隈川の河岸段丘(桑折字庫場〔播磨館〕から伊達崎字東館〔伊達崎城〕に沿って配置されました。これらは阿武隈川沿いの低地から西山城への攻撃に対する守りの要だったと考えられます。

西山城は現在国指定史跡として発掘作業が行われており、将来的には史跡公園としての整備が計画されています。

分国法「塵芥集」による伊達氏の統治

植宗は天文五年(一五三六)に塵芥集を制定し、政の基本とし

2 伊達家・上杉家・幕領と桑折の発展

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安永山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----

・定められた年貢を納めない者は田地の権利を取り上げる

・年貢を納めないで他に移ると盗人の罪
・田、畑をかくして年貢を納めない者は、妻子とも重罪

・拾い物をした場合は、拾得者が高札を立て告知し、持ち主が現れた場合には、その一〇分の一を札として受け取ること

東山道 都と陸奥を結ぶ古道。40ページ参照。

伊達家五山

光明寺（国見町大字光明寺）

東昌寺（万正寺字古釈迦堂といわれる）

観音寺（万正寺字中屋敷といわれる）

光福寺（桑折字興福寺）

満勝寺（万正寺字下万正寺）

※東昌寺の梵鐘は伝来寺に現存。

した。これが当時の諸国の分国法の範となったといわれています。

伊達氏のまちづくり

西山城の周囲の山麓部などでは、家臣たちが住む城下町の整備や伊達氏縁の寺社の創建が進められました。

桑折には、都から続く東山道が通っていました。街道の成立については、城から離れた現在の本町・西町・北町界隈がその始まりとされています。字本町の旧桑折警察署跡を発掘調査したところ、町家の建物の跡から西山城と同じ時代と思われる焼き物が発見されました。城の整備とともにまちが形成され、それが後世の桑折宿形成の基礎となったものと思われます。

伊達五山と文芸

四代伊達政依は、「京都五山」や「鎌倉五山」に倣って五つの寺を創建し、鎌倉仏教文化を桑折の地に残したといわれています。これらは伊達五山と総称され、のちに仙台へ移されて仙台藩伊達氏の北山五山となりました。

九代政宗は武将として伊達家の勢力を拡大させる一方で、和歌の創作にも優れていました。また、茶の湯や囃子、能、連歌などを嗜

2 伊達家・上杉家・幕領と桑折の発展

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----



桜の季節の西山城本丸跡

天文の乱 天文二一〜一七年（一五四二〜一五四八）の六年間、伊達植宗と晴宗との父子間の内紛に伴って発生した一連の争乱。一層の勢力拡大をもくろむ植宗が行った相馬氏への所領分与や上杉との養子縁組に対し、晴宗が反発したことが原因となった。

んでいたといわれています。

6 上杉氏と桑折の繁栄

伊達氏から上杉氏支配へ

十五代晴宗は、父植宗との確執（天文の乱）の末、桑折から米沢へ移りました。その後伊達氏は、十七代政宗の代になってから、仙台へとその拠点を移しました。

広大な領地を有していた十七代政宗は、豊臣秀吉の命令に背いて会津の芦名氏と戦をしたため、福島県内の領地を没収され、天正一九年（一五九二）、蒲生氏郷がその領地を引き継ぎました。

そして慶長三年（一五九八）、蒲生に代わって会津一二〇万石は上杉景勝の所領となり、伊達郡はその支配下となったのです。

慶長六年（一六〇二）、新支配者となった徳川家康の命により、景勝は会津一二〇万石から信夫・伊達両郡を含む米沢三〇万石に減封されてしまいます。

上杉氏の国づくり

米沢藩は、減封のため財政運営が苦しくなりますが、上杉氏は家

2 伊達家・上杉家・幕領と桑折の発展

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

『幻の西山城天守閣』 本多忠国は福島から桑折へ移ろうと、西館に江戸の豪商河村瑞賢に築城を依頼したことが『信達両郡案内記』（粟花儀兵衛蔵）に記されている。

「・・・西館に新規に御城を・・・江戸表より河村ずみけんと申者見分に参り目論相済 御普請御企にて村々御立林並百姓林まで材木伐取候処・・・播州姫路之御国替申来候に付企相止申候」

もし忠国の国替がなかったら、西山城にも天守閣がそびえていたかもしれない。

臣をそのまま召し抱えていました。その解決策として新田開発のための西根堰を完成させました。また、奥州・羽州街道の宿場の整備、半田銀山の再開発、養蚕技術の改良などを行いました。上杉氏の所領期間は短いものの、今日に至る約四百年間にわたり、桑折の繁栄に寄与しました。

7 幕府直轄領としての桑折

上杉氏が滅封されたあとの江戸時代の信夫・伊達両郡の大部分は、途中一時的に本多忠国の福島藩、松平忠尚の桑折藩による藩政が敷かれたことありますが、長きにわたって幕府直轄領とされました。これは、半田銀山や蚕糸業など、重要産業が存在していたことによります。

陣屋（代官）と半田銀山

福島から桑折に代官所を移したのは、福島藩主本多忠国に代わり福島に代官として着任した柘植伝兵衛です。桑折代官となった者には、柘植代官をはじめとして、銀山経営の経験者や父親が銀山経営の業績を持つ者がかなり多かったことがわかっています。ここから

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



竹内平右衛門墓所（大安寺）

も幕府が半田銀山経営を重視していたことがうかがえます。

代官と地域振興

代官の中には、桑折の人々のために尽力した者もいました。その代表的な人物と施策をみてみましょう。

竹内平右衛門の農民救済と国恩金

寛政一二年（一八〇〇）、桑折代官として着任した竹内は、天明の大飢饉により疲弊していた地域の復興と、年貢の安定確保をめざして取り組みました。九か条からなる「被仰渡書」には、農業などの奨励や荒れ地のまま土地を放棄している者の取り締まりなどについても記されています。また、困窮者に対する幼児の養育金や百姓手当てなどの制度を整え、農村復興政策として国恩金の制度を取り入れました。

寺西封元による農村振興

寺西は、塙・小名浜幕領の代官としての農村復興への功績が認められて、文化一一年（一八一四）に陸奥代官としてはもつとも権威ある桑折代官として着任しました。寺西代官は、当時支配下であった庭坂村と、新発田藩分領であった八島田陣屋の

国恩金 上納される年貢のうち、米価が下落したとき、領内の商人や農民から拠出させた積金によって補填した。

寺西代官と安藤野雁 寺西に長年仕えた用人北村新兵衛が病没したのちに、七歳の息子謙次（後の歌人、安藤野雁、88ページ参照）を養育したことも知られている。

2 伊達家・上杉家・幕領と桑折の発展

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



寺西封元墓所（無能寺）



寺西封元肖像

8 戊辰戦争

慶応四年・明治元年（一八六八）、鳥羽・伏見の戦いを発端として、

支配下にあった二子塚村（ともに現在の福島市）の用水が須川の酸性水の影響を受けるようになったため、新しい用水の堰を作る地域の嘆願を認めるなど、地域づくりに貢献しました。庭坂の大神宮境内には、寺西に地元が感謝の印として建立した寺西大明神碑が建立されています。無能寺にある寺西の墓碑には、その功績が記されています。

島田帯刀による農村復興

天保八年（一八三七）、天保の飢饉を乗り切った実績を認められた梁川代官島田帯刀が、桑折代官に着任しました。島田は金銀製品などの加工・売買、贅沢な食品売買の二つの禁止令を出しました。その後、穀物の貯蔵と酒造調査を実施し、村々で貯蔵している穀物のうち半分は封印し、半分は村の裁量で貸し出してもよいとするなど、農村復興に尽力しました。無能寺にある島田の墓所には、正妻をはじめ、後妻、五男、六男の墓も現存しています。

2 伊達家・上杉家・幕領と桑折の発展

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

御用金 徳川藩分領桑折陣屋内保管の御用金があつたが、戊辰戦争のどさくさでいずこかに紛失してしまつたという逸話がある。

戊辰戦争が始まりました。京都の新政府は、東北地方を治める奥羽鎮撫総督府を設置し、鳥羽・伏見の戦いに加担した会津藩の攻撃を東北諸藩に要請しました。しかし、東北諸藩は、会津藩への過酷な処分に対して寛大な措置を要請し、総督府と対立することとなりました。これが奥羽越列藩同盟へと展開していきませんが、結果的には新政府軍が勝利することになります。

この間、桑折は同盟軍の仙台藩兵や新政府軍らの通り道となり、政府軍の隊長世良修三一行は桑折の藤屋（現・ふれあい館）に一泊しています。また、陣屋が包囲されて元代官や手代が拘留され、仙台に連行されました。住民は不安から、家財道具などを近在に預け、疎開する者もいたといわれています。阿武隈川の河岸には番兵が配置され、山へ薪を取りに行くのにも通行証明書が必要で、稲作の忙しい時期にもかかわらず、三日に一日の割合いで、同盟軍の荷物運びや西山城跡の砲台場作りにのべ一万人も駆り出されました。

9 桑折藩と桑折県の誕生

桑折町の歴史の中で、短い期間ではあるものの、江戸時代の桑折藩と明治維新期の桑折県があつたことは、特筆すべきことです。

2 伊達家・上杉家・幕領と桑折の発展

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----

桑折藩

幕府直轄が続いていた一時期、元禄一三年（二七〇〇）、白河藩松平忠弘の養子忠尚は、伊達郡のうち桑折地方の二〇か村・二万石を与えられ、桑折藩を興しました。その後、半田銀山の鉱脈が発見されると、延享四年（一七四七）に再び幕領として佐渡奉行の支配下となりました。

桑折県

明治元年（一八六八）に会津藩、盛岡藩が相次いで降伏したことで、東北における戊辰戦争は終わりました。新政府は、会津藩や同盟の中心となった仙台藩などに対して、領地削減などの厳しい処分を行い、川俣と福島は相馬藩預りとなりました。桑折県は、郡村の役人を選挙で選ぶなど画期的な取り組みも実施しましたが、明治二年（一八六九）には見直しが行なわれて福島県となりました。

相馬藩預り このときの桑折県令・志賀さんぜんは、三左衛門直道は小説家志賀直哉の祖父。

取締機関の設置

桑折県官員名簿に「補」一〇名の名前が掲載されている。部下には「取締組」「番人」「下目付」など。捕亡→邏卒→巡查と職名が変わり、行政・司法の仕事から、現在の警察の内容に変わっていった。桑折は福島県警察の発祥の地ともいえる。

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

半田銀山
千百年の栄枯盛衰

半田銀山史跡公園、石垣





谷文晁「半田銀山之図」

10 半田銀山

「ハゲッペ半田山、登ればツールツル……」

かつてこんな歌がありました。今は植林されて緑豊かになりましたが、以前は山の表面には幾筋も地肌が剥きだしになっていたのです。桑折町内の国道や電車からはもちろん、霊山から眺める半田山は風貌怪異、肩を聳やかすようにして存在感を示していました。

そうです、この地肌は明治三四～三六年（一九〇一～一九〇三）の山崩れで山の東側半分がずり落ちた結果なのです。

約千百年にもおよぶ半田銀山の歴史は、このとき終わりを迎えようとしていました。今から百年前のことです。

11 半田銀山の歴史と経営者の変遷

半田銀山はかつて「三大銀山」「三大鉱山」に数えられました。半田銀山の発見は一説によれば大同二年（八〇七）とも伝えられますが、これを裏付ける史料はありません。寛文以前、伊達氏、上杉氏の統治時代にはすでに採掘が行われていたと考えられています。それ以前の記述は見つかっていません。上杉氏による採掘も行われまし



朝焼けの半田山

寛文年間 一六六一〜一六七二年
慶長年間 一五九六〜一六一五年

だが、江戸時代は長きにわたって幕府直轄領となり、江戸幕府の財政を支えました。幕末以降は民間人が経営しましたが、経営権は転々とし、昭和四五年（一九七〇）に鉱山としての幕が下ろされました。

上杉氏による本格的な採掘の開始（江戸時代前期）

慶長三年（一五九八）、上杉景勝は豊臣秀吉の命により越後から会津若松に移ります。このとき上杉領内には佐渡金山や奥会津の鉱山がありました。慶長六年（一六〇一）、景勝が滅封されて会津から米沢に移ると、藩財政の確保のために鉱山開発を重視しました。このとき、信達地方の鉱山として第一に半田銀山があげられました。慶応年間に作成された銀山由来と直山願いによると、慶長年間、綱勝の時代に本格的な採掘が始まったようです。

江戸幕府による直轄支配（江戸時代中〜後期）

上杉氏が信夫・伊達両郡を召し上げられたあと、福島藩本多氏や桑折藩松平氏も銀山経営を重視します。半田銀山は、延享四年（一七四七）に松平氏から幕府佐渡奉行所へ、ついで寛延二年（一七四九）には幕府の支配下に置かれる

3 半田銀山 千百年の栄枯盛衰

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

生野銀山 但馬国 (兵庫県朝来市)
石見銀山 石見国 (島根県大田市)



銀山精錬絵

こととなりました。

宝暦三年(一七五三)までは、生野や石見など幕府直轄鉾山の代官所から銀山役人や、江戸から普請役が派遣されていました。その後、桑折代官所に置かれた銀山役所が山師による請負稼を管轄する形となりました。幕末までは、新鉾脈の発見や新技術の導入、資金不足や施設老朽化や事故などで、生産高の盛衰を繰り返します。

幕末、欧米列強の外交圧力に加え、幕府長期政権の疲弊と腐敗は全国的な政情不安を招き、とくに東北諸藩は幕府派と改革派とに分かれ、また藩内もまつぶたつになるという状態でした。代官所もいつ襲われるかと浮き足立ち、銀山経営には本腰が入りません。安政七年(一八六〇)桜田門外の変が起き、まさに動乱の時代に突入します。元治元年(一八六四)、ついに幕府は銀山直営を中止します。このとき九坑がありました。明治になる三年前のことでした。

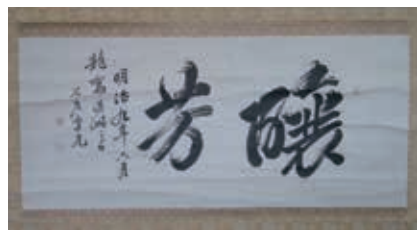
民間人による銀山の運営 (明治期以降)

戊辰戦争の最中の慶応三年(一八六七)、地元の実業家早田伝之助が採掘を再開しますが、明治三年(一八七〇)、坑内事故のため犠牲者を出し、撤退しました。

その二年後、イギリス人ゴットフレが銀山を視察に訪れました。

3 半田銀山 千百年の栄枯盛衰

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



明治天皇の随行員木戸孝允の
揮毫による「醸芳」



半田銀山之全図

12 半田銀山のもたらした文化・経済

代官所や銀山の役人の転勤や商人の出入りは、江戸や京、大坂を

明治七年（一八七四）、熊本出身の五代友厚が採掘を再開します。五代は薩摩藩閥を利用して新政府に入り込み、資本を蓄積していった政商で、新技術を採用して成績をあげていきます。五代は半田銀山での産金には国の支援が必要だとして、明治九年（一八七六）の明治天皇行幸を実現させました。このときに「醸芳」の名を受けました。明治一四年（一八八一）には再行幸があり、天皇の名代の北白川宮が鉱山の現場を直接ご覧になりました。

明治一七年（一八八四）、半田銀山史上最大の金の出坑量をみます。しかし、明治三四年（一九〇一）から三六年（一九〇三）にかけて半田山の崩壊が起き、それから銀山は衰微の一途をたどります。

明治四二年（一九〇九）以後、採出鉱石は日立鉱山株式会社に売却されるようになり、昭和一九年（一九四四）には経営権が五代から日本鉱業に渡りましたが、昭和五年（一九五〇）、ついに休山します。その後ズリ山から金の採取が試みられましたが、昭和五一年（一九七六）採掘権は放棄され、半田銀山の歴史に幕が下ろされました。

3 半田銀山 千百年の栄枯盛衰

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



半田銀山跡を見学する小学生

ズリ 鉱石を採るために必然的に掘るその周辺石砂のこと。

はじめ日本各地の情報文化をもたらしました。和歌や俳諧、国学や和算などの文化や学問、雛人形や家具調度品などの民芸品や工芸品、養蚕と製絹糸の技術、土木建築やトロッコ、さらに繭相場など、狭い地域の中にあっても文化・経済は江戸並みに盛んでした。

13 半田銀山の遺跡

半田銀山の遺構を活かし、半田銀山史跡公園が整備されています。また、近辺には当時の石積みなどが残され、往時の繁栄を偲はせます。

半田銀山史跡公園

羽州街道と東北自動車道の交差地にあり、明治天皇行幸記念碑、ズリ山、羽州街道とズリ山の立体交差跡と寺方石積、女郎橋跡などが見られます。

ズリ山跡

半田銀山史跡公園と東北自動車道の東側に残っているのは新しいズリです。古い時代のズリは廃坑の中や銀山地区、林王寺地区一帯に捨てられていましたが、そのあたりには木が生長していて、今では確認できません。

3 半田銀山 千百年の栄枯盛衰

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----



昭和初期の校庭拡張の際に築かれた半田醸芳小学校校門の亀甲積の石垣



中舗坑跡の内部

女郎橋

鉾山の従業員が繁華街に行った帰り、お店の人が見送りにきて別れた橋のこと。現在は字名にもなっています。

トロツコ軌道

半田銀山史跡公園に残るのは、羽州街道と立体交差した跡です。ズリを運んだものです。動力は馬と人で、坑内でも坑車を一二両連結して馬を使ったとの記録もあります。

後年、鉾石をすべて日立鉾山に売却することになったとき、女郎橋から桑折駅までトロツコで運びました。

明治天皇行幸記念碑

当初、買石町（後述）の銀山本部事務所にあったのを半田銀山史跡公園に移設しました。

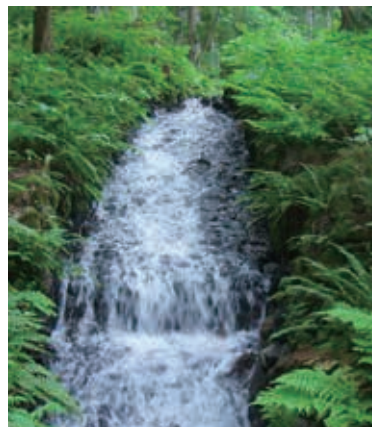
肥後の石工が残した石積み

五代友厚が肥後の石工で有名な熊本から呼び寄せた石工勘七は、桑折の石工に「寺方積」と「亀甲積」という優れた技術を伝えました。寺方積は半田銀山史跡公園のほかに、御免町地内の数か所と十分一の旧横山邸跡に残されています。

亀甲積は半田醸芳小学校校門の石垣に見られます。この石積みは

3 半田銀山 千百年の栄枯盛衰

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



亀甲積の工法を用いた
「亀張水路」



銀山坑口



中舗坑跡

堅固さと美的な面で優れているとされ、石の大きさは違いますが、城の石垣にも用いられる工法です。正六角の石を刻むのに一日数個がやっとだったと、当時の人が話していました。

また、亀甲積は水路にも活かされ、「亀張」「亀腹張工法」と呼ばれています。新半田沼からの導水路や、早田伝之助氏宅の裏の川にも見られる三面石組み造りの水路は、明治四三年（一九一〇）八月に起きた半田沼抜けの大災害後に築かれたもので、災害復興を兼ねていましたが、水田に水が必要な時期だったため、水門に土のうを積み重ねて水を止めて作業し、時間をみて田んぼへの水を流し、また止めてということを繰り返して進められた工事でした。底に敷き詰めた石の角に水が当たって勢いを弱める技法で、水は一直線の急流を、波頭を立てながら流れ落ちます。

現在も灌漑用水として利用されていて、増水時に轟音を響かせ瀑布となつて流れ下る様、渇水時にさらさらと快いせせらぎと、この水路の織りなす情景や樹間に奏でられる響きは、訪れるたびに心を癒してくれます。

買石町

宝暦三年（一七五三）完成。役所、精錬所のほかに石買い、大工、

3 半田銀山 千百年の栄枯盛衰

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



半田銀山資料が展示されている
旧伊達郡役所

の深い坑道から毎時七キロリットルもの排水が可能になりました。
発電所は鉱山には必要でしたが、半田山の崩壊による破損が相次
ぎ、やむなく明治三四年（一九〇一）には廃止となりました。

使用道具

増埧るつば、ずんどん車、精錬器具装置など多数が旧伊達郡役所に展示
されています。

14 半田山自然公園物語

半田旧沼 半田旧沼跡は新沼（現在の
半田沼）と離れた位置にあり、水系的
な関わりはない。

半田沼の畔にある碑文 「明治四十三年
八月ノ豪雨ニヨリソノ東端ヲ破リ一大
崩壊ヲ来シ一木一草ヲ残サズ、下流農
耕地地ニ亘リ惨害悽愴ヲ極メ此ノ被害
額実ニ二十九万ニ達シタリ。…一地
域デコレダケノ大災害稀ナリ…」

※当時の物価は、米一俵（六〇キログ
ラム）が約五円三六銭。

明治三二年（一八九九）九月、山腹に亀裂が生じ、以来揺れや地
崩れが続き村民は不安な毎日を過ごしていました。

明治三三年（一九〇〇）ごろには、山の斜面南北に大きな亀裂が
縦横に何か所にも生じる地変（階段状の食い違い七〜八尺より一〜
二丈、裂け口一〜二尺より二〜三間）が起きました。

明治三四年（一九〇一）〜明治三六年（一九〇三）にかけて激し
い山崩れが相次いで起き、この崩壊や陥没などによって天然の堰堤
ができ、新しく現在の半田沼が形造られました。

このときの被害は甚大で、民家三〇戸や銀山労働者宿舎二六戸が

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



桑折角田書店発行の絵はがき 左：「半田村水害状況 熊野神社」とある

危険となり移転、宅地田畑約二四ヘクタール、山林原野一二ヘクタールに土砂岩石が覆い被さりました。また、銀山では第一坑口が埋没するなど大損害を受けました。

明治四三年（一九一〇）は八月に豪雨が続ぎ、東海、関東、東北で大災害が発生しました。半田山は以前からの山崩れによりむき出しになっていた地肌が豪雨に削られ、土石流が起こりました。窪地に雨水が流れ込み、それがあふれて、一六日、ついに人々が心配していたとおりに堰堤が決壊したのです。濁流は、至る所にあつた鉦山のズリを巻き込み、銀山の施設や村の家屋をなぎ倒し、田畑を埋め流失する大被害となりました。沼の南の畔にある碑文からも、被害地域が銀山・栗和田地区中心に東北本線にまで及んだことがわかります。

屋根までの埋没三〇棟、全半壊一四棟、床下浸水八一棟という被害で、熊野神社の鳥居に腰掛けられたほど土砂がたまりました。この他耕地や鉦山関係施設にも大きな被害が出て、この地区の人々はいまの惨状になす術を失っていました。当時を知る地元の人々の話によれば、日ごろから危険性が周知されていて、避難態勢ができていたため、死者が一人も出なかったのだそうです。

このときの災害を機に、半田銀山は事実上の終焉に向かうことと

3 半田銀山 千百年の栄枯盛衰

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



桃畑越しに眺める緑の半田山

高田菊太郎の活躍

81ページ参照。

なります。

この大災害の後、村議会議員の高田菊太郎の活躍もあり、半田山
 一帯の国有林の無償払い下げ、県の治山事業導入などが叶い、復興
 が進められました。

植林や沼の排水溝の整備が一段落した昭和六年（一九三二）、沼の
 畔に二人の寄進者による石の祠が建てられました。このころから沼
 も安定し、桜も見事に咲き始め美しい環境が生まれ、これからの安
 全への祈りを込めて「新沼」と呼ぶようになりました。

百年経った現在、禿げ山はすっかり木々に覆われ、緑豊かな半
 田山に生まれ変わりました。さらに公園整備も行われ、平成元年
 （一九八九）、「半田山自然公園」の誕生となったのです。

県や村の行政と地元住民が協力して、災害を克服し豊かな自然を
 回復させた苦労がしみ込んでいる宝の自然公園は、治山治水のモデ
 ルなのです。

この沼の地下には坑道があるのに、なぜ水が溜まり続けているの
 か、不思議でもあります。鉾山の記録をみると、これは地底深く
 にかなり厚い粘土質の地層があるためと思われる。頂上近くから
 見下ろすと、新沼はハートの形に蒼い水が神秘的に輝いて、新しい
 命の喜びを湛えています。

3 半田銀山 千百年の栄枯盛衰

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

街道と舟運を
活かした桑折宿

復元された追分（左が羽州街道、右が奥州街道）





五街道 江戸幕府によって整備された
江戸・日本橋を起点とする五つの陸上
交通路。東海道、中山道、甲州街道、
奥州街道、日光街道の五つ。

畿内七道 大和朝廷によって整備された大和・奈良・京都を起点とする七つの陸上交通路。東海道・東山道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西海道。近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・陸奥・羽羽の八国よりなる。およびそれらを連ねる幹線道路をいう。

東山道 近江・美濃・飛驒・信濃・上野・下野・陸奥・出羽の八国よりなる。およびそれらを連ねる幹線道路をいう。

15 奥州街道と羽州街道

桑折には「追分」という地名が残っています。追分とは、街道の分岐点のことで、桑折の追分は、奥州街道から羽州街道が分岐する重要な場所でした。奥州街道は江戸から青森県津軽へ至り、東日本を貫く重要な役割を担う道でした。また、羽州街道は出羽三山の信仰の道としても利用されてきました。

江戸時代以前の古道・東山道 とうさんどう

七世紀から八世紀にかけて、天皇を中心とした中央集権体制の整備を行っていた朝廷は、官吏が都と国府を往来する通信・連絡・交通機関として駅馬・伝馬制を敷き、駅家の設置と駅馬の配置を進めました。

東山道には二つの意味があります。畿内七道のひとつで、近畿地方から中部・関東山地沿いを経て東北へと至る地域の名称であり、また、もうひとつはこれらの諸国を縦貫する交通路を指しました。

福島盆地内は奥羽山脈と阿武隈川の地形的

延喜式 平安中期の律令の施行細則。五〇巻。延喜五年（九〇五）藤原時平らが醍醐天皇の命により編纂を始め、時平の死後藤原忠平らにより延長五年（九二七）完成。

押関 半田山の頂上にある地名。関西では「おさえのせき」、桑折では「おしのせき」と読む。

吾妻街道 鎌倉時代に成立した歴史書「吾妻鏡」によれば、半田山頂上を通過していたといわれる。金売吉次や源義経が通ったと伝わる。

奥州道中 五街道としての奥州街道は正式には奥州道中という。白河から仙台までを仙台道、仙台から蝦夷函館までを松前道と区分することもある。

桑折宿を通過した大名 奥州街道を使った松前藩、陸奥国の八戸、盛岡、一ノ関、仙台の五家と、羽州街道を利用した陸奥国の弘前、黒石、出羽国の秋田、本庄、亀田、新庄、天童、山形、上山、荘内、松山、長瀬、矢島の一三家。 ※通過する大名は時期によって変動。

な制約により、複数路線の確保が難しい土地でした。福島盆地と白石盆地を継ぐのは、現在の国道四号付近しかありませんでした。「延喜式」によると、信達地方の東山道駅馬は、「湯日（安達町油井）」「岑越（信夫山の山麓）」「伊達（桑折―国見あたり）」の順となっています。以上のことから、東山道は「油井・信夫山・藤田・白石」のルートであり、桑折を通過していたと推定されています。

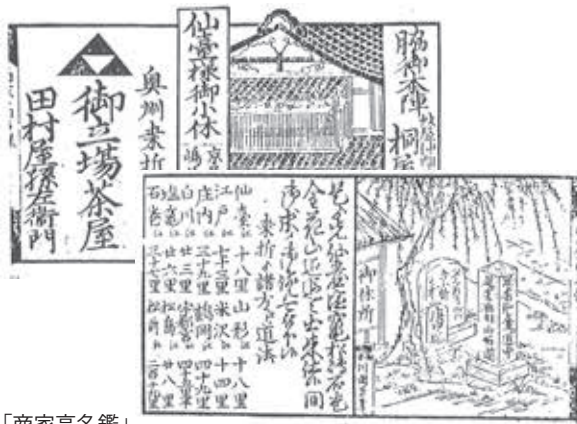
奥州街道

奥州街道は、江戸日本橋を基点に、青森県の三厩に至る一四回の街道であり、白河までは幕府が直営する五街道のひとつでした。桑折を通過する参勤交代の諸大名は一八家にもほり、生糸や煙草など、物資の輸送も盛んでした。

奥州街道の整備は、慶長三年（一五九八）、豊臣秀吉の命を受け、会津若松城主だった上杉景勝により着手されました。江戸幕府が成立した翌年の慶長九年（一六〇四）、幕府は東海・東北・北陸諸街道の改修、一里塚の構築を諸大名に命じ、五街道を中心に道路および宿駅の整備を行いました。米沢藩上杉氏は、直江兼続をして桑折の一里塚を構築させました。桑折では、「桑折字赤坂」「谷地字塚下」「南半田字行人段」に一里塚がありました。

4 街道と舟運を活かした桑折宿

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----



桑折宿の位置 前宿は瀬上宿。後宿は、奥州街道が藤田宿、羽州街道が小坂宿。

「商家高名鑑」「道標」「柳の句碑」「庚申塔」「枝垂れ柳」「御休処」が描かれ、追分から各地への距離が記されている。



現在の羽州街道一里塚跡
(南半田字行人段)

羽州街道

羽州街道は、桑折追分を基点として半田醸芳小学校の前を通り、北半田益子神社前、国見町の小坂宿、小坂峠、七ヶ宿、上山、山形、天童、秋田などを経て、青森県の油川で再び奥州街道に接続します。

秋田藩の佐竹氏をはじめとして、出羽国諸藩の参勤交代に用いられ、とくに佐竹氏が街道整備に力を入れていました。また、幕領屋代郷（現在の山形県高島町）の城米が小坂峠を越えて桑折に運ばれ、上郡河岸などから江戸へと積み出されていました。

羽州街道は、明治一四年（一八八二）、米沢と福島を結ぶ万世大路ができてから、急速に廃れていきました。

16 桑折宿

桑折宿は、日本橋から七〇里（約二八〇キロメートル）、第一番宿場の千住から第五八番目の位置にありました。

江戸時代の桑折宿は、西山城築城のころ作られたまちを基礎として整備されていきました。宿の整備は、街道整備に伴い、慶長九年（一六〇四）の幕令や直江兼続の掟などによって進められました。

寛永一二年（一六三五）、三代将軍家光により「武家諸法度」が改

4 街道と舟運を活かした桑折宿

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



大字上郡文書 寛政六年九月 桑折村絵図

寛政六年は西暦1794年。絵図のほぼ中央に陣屋・本陣が描かれている。
街道沿いに寺や建物が建ち並ぶ様子や、阿武隈川、西根堰も見える。

直江兼続の掟 慶長九年（一六〇四）
に直江兼続から米沢藩領内に出された
一五か条からなる掟。伝馬宿継ぎおよ
び道橋普請のことを厳命した。
享保年間 一七一六〜一七三五年。

訂公布され、参勤交代が制度化されました。これを受けて、街道お
よび宿駅がいちだんと整備されました。

陣屋町としての桑折

貞享三年（一六八六）、それまで福島に置かれていた幕領福島陣屋
が桑折に移されました。この陣屋は元禄一三年（一七〇〇）に桑折
藩が成立したときも桑折藩の館として用いられ、また、幕領のとき
は幕府代官が在陣しました。桑折は、陣屋町としての性格を有して
いました。

陣屋は代官が行政を執行し、居住する地区であり、一般には陣屋
と本陣は宿の中心にあります。しかし、桑折の陣屋は町外れに寄せ
られています（旧伊達郡役所の東側、現在の陣屋の杜公園の北側）。
これは、たびたび発生した火災の延焼を防ぐためではないかと考え
られています。

享保年間（一七一六〜一七三五）のころには、桑折町では毎月の
定期市（二と八のつく日の六斎市）のほか、絹糸を取引する市が開
かれていたという記録があります。また、廻米用の米・大豆などを
入れておく蔵があり、蔵場（庫場）とも書く）と呼ばれていました。
桑折は、当地方を支配する者が在陣する陣屋をもつ政治的中、心地で

4 街道と舟運を活かした桑折宿

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



現在の桑折宿本陣跡



陣屋・本陣位置図

大肝煎 郡奉行の下に仕える村役人で、主として租税のとりまとめ、納入を司った。信達両郡は、信夫・西根・東根・小手の四郡に区分されていたことから、四郡役とも呼ばれた。四郡役とは、信夫・西根・東根・小手の四郷のうち、ひとつを支配する役のことをいう。

あり、また村々からの米を保管する蔵があり、市が開かれる経済的の中心でもありました。さらに、奥州街道の宿駅であり、かつ羽州街道の分岐点として、人と物が活発に行き交う賑わいのある町でした。

本陣

寛文四年（一六六四）に上杉家が信達地方を去るとき、西根郷の大肝煎だった佐藤新右衛門は、桑折に留まることを許され、その後佐藤家は桑折宿の本陣として代々その役を担いました。

享保年間には「御宿」として記されていたのは佐藤家のみですが、延享三年（一七四六）には、久保理衛門と菊田伴右衛門も含めた三軒の宿名が記されています。

木戸口

木戸は不審な者を宿場町に入れないようにするために設けられた施設です。宿場町の両端に備えられた木戸と木戸の間が宿場町とされ、木戸口に設けられた門は日の出のときに開かれ、日の入りの時刻に閉められました。

桑折宿南口木戸

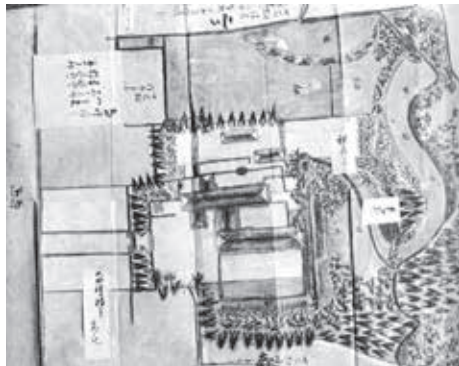
桑折字新町と大字万正寺との境にあった木戸口。桑折側には

4 街道と舟運を活かした桑折宿

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



「金草鞋 桑折」



本陣図

家屋が建ち並んでいましたが、万正寺側は田畑でした。桑折宿南口木戸は江戸を向いているので、「町頭」「登り口」といわれます。

桑折宿北口木戸

桑折字上町の旧奥州街道（県道国見福島線）が広くなっている場所（桑折カトリック教会付近）が木戸跡です。木戸よりも南側は家屋が並んでいましたが、北側の桑折追分までは一面の桑畑でした。桑折宿北口木戸は、江戸と逆方向にあたるため、「町尻」「下り口」といわれます。

桑折宿の賑わい

桑折宿は多くの藩の参勤交代行列が通過し、宿泊、休憩する一行もありました。とくに、仙台藩伊達家の参勤交代の一行は千名を超す大所帯だったようです。桑折宿の「本陣」はほかの本陣のように街の中にはなく、街道から専用の参道を通り、家並みを過ぎたところに「本陣表門」があり、表門をくぐったところが本陣宿でした。じっぺんしゃいっく十返舎一九は、戯誌の「方言修行金草鞋」に「桑折宿」を紹介しています。また、日本全図を作成した伊能忠敬は、桑折宿にあった大和屋に一泊しています。

4 街道と舟運を活かした桑折宿

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



上郡河岸場：大字上郡文書 元禄十四年八月上郡村絵図

17 阿武隈川舟運しゅううん

阿武隈川は、舟運を通して桑折と江戸、そのほかの地域とをつなぐ重要な交通・流通経路でした。三つの河岸が置かれた桑折は、国の広い地域の経済圏けいけんと結ばれていたといえるでしょう。

江戸時代の阿武隈川は、川幅が九〇メートルから一八〇メートル、水深は一メートルから三メートルでした。当時の阿武隈川には堤防ていぼうがありませんでした。川の水かさの少ないときは畑地の低いところを流れましたが、水かさが多いときは川沿いの畑に冠水かんすいします。川の近くの畑は、野菜類は適さず、川の増水ぞうすいに耐えらるる桑が植えられ、一面桑畑だったようです。

阿武隈川中流域における舟運は、当地を支配していた米沢藩によって廻米などを運ぶ実用的な輸送手段になり、その後桑折を含む信達二郡が幕領となつてから本格化しました。

小鵜飼船・船船・小廻船・千石船

阿武隈川では、上流から下流まで下っていく川の状態に応じて、用いる船を使い分けていました。桑折の河岸からは途中に難所なんしよがあったため、各河岸から五〇俵ごひょうの米を積載できる小鵜飼船（二〇石ごく）で運び、

4 街道と舟運を活かした桑折宿

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

荻生徂徠撰「妙音廟碑」 天保一四年（二八四三）に編纂された『信達一統志』の「渡利邨」に収録された碑文。

「米沢上杉支配の頃の阿武隈川は、福島から水沢・沼上までの間に馬洗瀧・青瀧・梁瀧・猿羽根（猿跳）などの難所があつて、舟の航行ができなかつた。（中略）將軍家光のとき江戸の富裕な商人渡辺氏の子友以が、阿武隈川の舟路を開鑿し、国家千百世の功を立てたいとの大志を抱いた。（中略）寛文改元辛丑年（一六六二）、官はついに友以の願いを聞き届けた。江戸の大官伊奈氏等は、友以の計画を心から称賛しこれを助けた。幕府の許可を得た友以は巨万の費用を投入し、歳を経ずして馬洗瀧から猿羽根の間の怪石悪巖を打ち砕いて福島から水沢までの舟の航行を可能にした」（原文は漢文）

寛文年間 一六六一〜一六七二年

丸森の水沢河岸で艀船（四四石）、亘理の荒浜で小廻船（二〇〇石）に積み替えていました。さらに貞山堀を通り、寒風沢で千石船（二四〇〜四八〇石）に積み替え、最終的に各藩の蔵が建ち並んでいた浅草や両国付近（現在の東京）まで運んでいました。

阿武隈川中流域舟運の始まり

桑折を含む阿武隈川中流域の舟運は、米沢藩によって本格的に整えられたと考えられます。桑折の栗花家文書に、米沢藩が明暦元年（一六五五）から万治二年（一六五九）までの五年間、西根郷の藩米を毎年江戸に送つていたという記録が残されています。米沢藩にとつて江戸廻米は藩財政を維持するうえで重要でした。

このころを阿武隈川中流域での舟運の始まりとみることでありますが、まだこの時期は水路の開削が進んでおらず、舟や馬に積み替えるを繰り返して運んでいたと考えられます。

寛文年間、江戸の豪商渡辺友以によって阿武隈川中流域の水路が開削されました。その後、河村瑞賢の東廻り航路開拓によって、阿武隈川舟運は東廻り海運と結びつき、それまでの北前船など西廻り航路に並び、全国的海運体系の一環を担うこととなりました。

4 街道と舟運を活かした桑折宿

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----



上郡河岸場

郷蔵
城米を保管するための蔵。

桑折の河岸

史料により異なりますが、桑折地区には、「桑折河岸」「上郡河岸」「伊達崎河岸」の三つの官営河岸がありました。

桑折河岸

桑折河岸は、阿武隈川の河岸の中で、福島・梁川河岸とともに重要な位置を占めていました。桑折陣屋から南へ四町あまりの段丘の上、元伊達家家臣桑折氏の居城播磨館跡に桑折河岸組村一〇か村の郷蔵があり（庫場）、桑折河岸はそこから六町ほど離れた阿武隈川の川岸にありました。町民角田勘左衛門が庫場管理守人として採用されました。

宝暦一四年（一七六四）には小鵜飼船が七四艘ありました。

上郡河岸

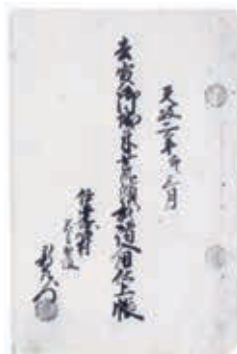
上郡河岸は、寛文四年（一六六四）に米沢藩が減封されたときに幕領となった屋代郷の城米を積み出す河岸でした。文化一二年（一八一五）に河岸の蔵場が全焼したため、役目を徳江河岸（現在の国見町）に譲り、上郡河岸は廃止されました。

伊達崎河岸

現在の伊達崎橋の近くに舟場という地名が残っていて、ここに河岸があったと考えられます。伊達崎河岸には伊達崎地区

4 街道と舟運を活かした桑折宿

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



御城米仕上帳



城米輸送の旗



廻米御用鑑札

の村々の年貢のほか、幕領屋代郷の城米が積み出されることもあったようです。上郡河岸とともに、屋代郷の城米積み出しの役割も担っていました。

民間運営河岸

官営河岸である桑折・上郡・伊達崎には郷蔵が建ち並び、囲いが設けられ、河岸守がいました。民間物資を入れることはできなかつたため、民間物資の積み込みや荷揚げは別の場所で行っていたと考えられます。つまり、民間が運営する河岸があったことが推測されます。

蒸汽の桜・上郡蒸汽船発着所

明治になって年貢米納税から現金納税に変わり、河岸の管理も官営から民間に移行しました。その民間河岸の一つが上郡の「蒸汽の桜」蒸汽船発着所です。

明治一七年（一八八四）ごろ、大槻、八巻ほか数名が、福島〜荒浜間に「桑折丸」「金剛丸」「飛龍丸」の蒸汽船就航を計画しました。蒸汽船は隅田川の川蒸汽船と同じもので、荒浜から丸森まではうまく進めましたが、丸森からは川底が浅いため多人数で引き上げてい

4 街道と舟運を活かした桑折宿

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



蒸汽の桜



福島県岩代国福島町信夫橋真景ノ図（部分）
福島県庁付近の阿武隈川を進む蒸気船

ました。上郡蒸気船発着所では川底が浅すぎ、ついに座礁してしまいました。その残骸は昭和の初めころまであったそうです。

18 街道や舟運がもたらした江戸文化

近世、桑折宿には奥州街道が通り、出羽へ向かう羽州街道が分岐していました。宿は人や物の集散を繰り返す場所であり、桑折宿においては米が最大の産物でした。阿武隈川の舟運を利用して荒浜・松島へ運ばれ、大型船に積み替えられて江戸や大坂まで送られました。米のほか、紅花や蚕種・養蚕、半田銀山からの産出物などもありました。これらの物資の移動に伴い、江戸や大坂からの商人の往来も盛んになり、文書などのやり取りも発達し、情報の伝達も盛んになりました。

また、奥州・羽州の街道は参勤交代の重要な道筋であり、大名行列だけでなく幕府の役人や公家の往復にも使われました。

こうした物資の流通と人の往来は、武士などの支配階級による文化から、産業の発達に伴う商人文化＝元禄文化に取って代わる時代の流れを生じさせました。

4 街道と舟運を活かした桑折宿

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

土木遺産
水路網の魅力と
西根堰と

西根上堰と産ヶ沢川の合流点



西根 西根堰の西根とは西根郷のこと。

西根郷とは、阿武隈川西側の段丘上の台地のことで、川東は東根郷と呼ばれていた。西根郷は台地であるために水の確保が難しく、多くは原野だったという。

堰 広辞苑によれば、堰とは「取水や水位・流量調節のために、水路中または流出口に築造した構造物」とされ、用水路そのものを指す場合もある。

元和年間 一六一五〜一六三三年
寛永年間 一六二四〜一六四三年



戸左行筆「西根堰開鑿之図」

19 西根堰

西根堰は、元和から寛永の時期（一六〇〇年代前半）にかけて、当時の支配者であった米沢藩主・上杉景勝、定勝の二代にわたって作られた用水路であり、西根下堰と西根上堰の二つの用水路の総称です。西根堰は、農業用水に乏しかったこの地を潤し、今日までの約四百年間にわたり、地域の開発と振興に大きく貢献しました。今も町内を流れる西根堰は、土木遺産としても、土木技術史的にも貴重なものです。

西根堰がつくられた背景

上杉家は会津、置賜、伊達・信夫の二二〇万石でしたが、関が原の合戦で西軍に味方したため、徳川家康によって米沢・伊達・信夫の三〇万石に減封されました。しかし、家臣五千人をそのまま召し抱えたために藩の財政はとても厳しく、新田開発で耕作地を増やし、年貢を確保しなければなりませんでした。そのために必要だったのが用水路であり、西根堰が開削されることとなりました。こうした新田開発は、桑折だけでなく藩の財政再建策として全国的に行われていました。

5 土木遺産 西根堰と水路網の魅力

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



西根堰（昭和初期ころ）

佐藤新右衛門 佐藤新右衛門の初代は
大鳥城主佐藤基治で、奥州藤原氏の一族として信達両郡を支配していた。佐藤氏が奥州合戦（一一八九年）で伊達朝宗に滅ぼされた四百年後、十八代佐藤新右衛門は上杉藩に入った。
先覚者 人々より先に物事の道理や時代の流れの変化を見抜き、事を行った人。くさわけ。

西根下堰と佐藤新右衛門家忠

西根下堰の計画を立案したのは、大肝煎である桑折村の佐藤新右衛門家忠です。佐藤は、西根郷地頭として郷土・郷民を守るため西根堰の開削を計画し、上杉藩の軍学・土木技術代官であった古河善兵衛重吉に相談しました。佐藤と古河の計画は、景勝および藩の重臣に認められることとなりました。

西根下堰は元和四年（一六一八）春に着工し、同年暮れには完成しました。摺上川の湯野村八卦（飯坂温泉の十綱橋下流）から掘り始め、塩野目・増田・牛沢・松原・成田・万正寺・南桑折・上郡・下郡・伊達崎・徳江に至り、佐久間川に注ぎ阿武隈川へ流れ出ます。その長さは三里一九町（二四キロメートル）であり、途中、交差する河川の水も集めて水路に取り入れています。きわめて短い期間での完成の陰には、先覚者たちの身を犠牲にした努力と、地域住民の血と汗の労働があったものと思われます。

この工事により四百町歩（約三九七ヘクタール）の新田が新たに開発されました。

西根上堰と古河善兵衛重吉

西根下堰は完成しましたが、地形の低いところを通したため、灌

5 土木遺産 西根堰と水路網の魅力

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



西根堰碑（西根神社）

溉面積は西根郷全域の四分の一にすぎず、まだ多くの土地が原野や未灌漑の耕作地として残されていました。

佐藤は、水不足になりがちな上郡や下半田などを通す上堰を計画し、福島奉行と福島郡代を兼任していた古河に援助を求めました。

佐藤から相談を受けた古河はすぐに現地調査に着手し、提灯を各所に置いて、夜間に信夫山からこれを見て高低測量を行なったと伝えられています。そして、詳細な計画を立て、疏水開削見積りを藩主の定勝に上申しますが、当時の米沢藩は幕府から重い軍役を課せられていたため容易に許可が下りませんでした。古河と佐藤の請願は何度も繰り返され、古河が私財を投じて工事を行うことで、ようやく許可が下りました。

西根上堰は、寛永元年（一六二四）に着工し、西根下堰の取水口よりも約二、一八メートル上流の湯野村穴原から掘り始め、塩野目・増田・松原・成田・万正寺を経て桑折に入り、さらに北上して国見町を通じて東へと進み、森江野・大枝を経て梁川の五十沢で阿武隈川へと流れ出ます。桑折の扇状地を南北に横切る西根上堰は、産ヶ沢川・佐久間川・普蔵川の三本の河川と交差・合流しています。

この交差・合流で水を配分しながら扇状地の田畑に活用する水路設計です。その長さは二九・二キロメートル、灌漑面積は寛永末期の検

5 土木遺産 西根堰と水路網の魅力

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



穴原の西根上堰取水口付近

地帳では約六五四ヘクタールにおよんだことが確認されています。それ以降、西根堰の水で潤された土地に移住する農民が増加し、さらに多くの新田が開かれるようになりました。そして、藩財政の建て直しにも大きく貢献し、寛文一二年（一六七二）の幕府検地では一万八千石に達したといえます。

西根上堰にみる先進的な土木技術

西根上堰は、総延長二九・二キロメートル、水路勾配は三千分の一から一千分の一というきわめて緩い勾配であり、高度な測量・施工技術に支えられています。三千分の一とは、三キロメートル流れてわずか一メートル下るといふ緩さであり、見た目には下っていることがわかりません。それどころか、周りの地形との関係から、西根堰の水が上っていると錯覚することがあるほどです。

こうした西根上堰の工事は、当時としては高度で先進的な土木技術に裏付けられたものでした。上堰の取水口は下堰より二・一八二メートル上流の穴原にあり、岩盤が壁のように切り立ち、きわめて硬いために、そのトンネル工事は困難なものでした。この現場には半田銀山の金掘坑夫が召集され、ノミやツルハシなどで掘り進みました。しかし、トンネルが小さいために作業効率は悪く、坑夫が交

5 土木遺産 西根堰と水路網の魅力

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

尺 一尺は約三〇・三センチメートル
 角落し 水門等の両側に、角材等を横に渡して、水位を調整するもの。産ヶ沢との交差部では、通常時に産ヶ沢川の水をせき上げて西根上堰に取り入れるために角落しが使われていた。

伏越し 川（水路含む）の下を横断して通す管路のこと。流れの機構は水の上に引き上げるサイホンとは異なり、その形状から逆サイホンと呼ばれることもある。

西根堰の風景

七つのビューポイント

- ① 松原／松原寺
まつゆき まつゆき
- ② 万正寺／田植橋
まんしやうじ たんてはし
- ③ 大堰
おおわや
- ④ 芝堤／観音橋
かひのさき かのんばし
- ⑤ 谷地／中谷地
やち ちやち
- ⑥ 下半田／寺之内
しもはんた てらのうち
- ⑦ 伊達崎／北沢
いたさき きたざわ

(113ページ 地図参照)



①松原／松原寺：上堰と下堰とを前後に一望



②万正寺／田植橋
：下堰と産ヶ沢川との伏越し上下交差点

代で掘っても、一日二尺から三尺ほどしか進めなかったといひます。
 また、下流の芝堤では産ヶ沢を水平十字に交差します。これは木製水門で産ヶ沢川の水を取り入れ、洪水のときには角落しを外して水路の水を産ヶ沢川に流すという構造です。現在は可動堰に作り変えられています。現場では往時の姿を偲ぶことができます。
 また、佐久間川、普蔵川とは、その下への木製伏越しの設置により、交差させることに成功しています。

5 土木遺産 西根堰と水路網の魅力

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



⑤谷地／中谷地
：佐久間川と上堰との上下交差点



⑥下半田／寺之内
：普蔵川と上堰との上下交差点



⑦伊達崎／北沢：下堰と佐久間川との合流点



③大榎／老人福祉センター大かや園下
：水がさかのぼるように見える上堰。
右に上堰と産ヶ沢川が見える



④芝堤／観音橋：産ヶ沢川と上堰と水平十字合流点
（上：西北、下：東南）

5 土木遺産 西根堰と水路網の魅力

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

20 まちなかの水路

奥州街道の宿場町であったころの桑折町の街割は、奥州街道に面して間口が狭く、奥行きがとても長い区画で構成されていて、裏手には畑もあったといわれています。この町割りには、宅地が細分化されて変わってしまったところもありますが、現在でもかなり残されています。

桑折宿の町の暮らしを支えていたのが、宿場を北から南へと流下する水路であり、炊事のための生活用水・農業用水・防火用水など、さまざまな用途に使われていました。その水源は追分のさらに北側の水脈と西根上堰からの分流によっていました。

桑折町の中を流れる水路は、陣屋があった南側に向かって流れるため、逆川と呼ばれたことがありました。

逆川 川下にお上の代官所・陣屋があったので、川上の住民が用水を汚さないように気遣った呼び名ともいわれる。

桑折のまちなかの水路の特徴は、奥州街道の中央に一本、両側の宅地を貫くように二本の上水路が流れていたことです。中央の水路は明治の初頭に埋められて現存しませんが、現在は奥州街道の東側宅地の中を上町の島貫歯科医院から南へ、北町の東側裏、さらに本町を通り、陣屋の杜公園に流れ、四号バイパスを横切って根岸から西根下堰に合流しています。

旧伊達郡役所
桑折の近代化

旧伊達郡役所





伊達郡役所開所式



郡役所改修工事のときに現有建築物から起こされた伊達郡役所正面図

21 旧伊達郡役所

明治一一年（一八七八）の郡区町村編制法によって、伊達郡が生まれました。このときの郡は自治体ではなく、郡長以下は中央政府の官僚が任命される制度でした。また、当初の伊達郡役所は、桑折ではなく、保原に置かれていました。

保原から桑折に移った郡役所

保原にあった郡役所は老朽化が著しく、当時の福島県令三島通庸は保原町に改修費の寄付を求めたものの、費用は集まりませんでした。そこで、桑折の篤志家（貴族院議員である三代角田林兵衛ほか）が郡役所の誘致に尽力し、明治一六年四月（一八八三）に郡役所を桑折に移転させることが決まったのです。

町民らの寄付による建設

建設費用は、篤志家による寄付のほか、住民の寄付を含めた二万五千円～二万六千円で、明治一六年一〇月に竣工しました。西洋建築がまだ少ない時代でしたが、地元大工の山内幸之助らが独学で研究し、建設しました。山内は、桑折郡役所の建築が認められ、その後

6 旧伊達郡役所と桑折の近代化

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



福島県伊達郡養蚕場地理案内

蚕種
もの。
蛾に卵を台紙に産みつけさせた

山形県庁舎（現在の文翔館）の建設に関わったといわれています。これらの出来事から、当時の町民の熱い思いが伝わってきます。郡役所は、大正一五年（一九二六）に郡役所が廃止になるまでの約四三年間、郡行政の中心として活躍し、桑折の政治・経済の発展に大きく寄与しました。

22 養蚕

近ごろは養蚕についての話は聞かれませんが、桑折町は古くから養蚕との関係が深い土地柄です。蚕を飼育し、蚕が吐き出して作った繭が現金収入となるため、農家にとって大切な産業でした。

養蚕には、養蚕業（蚕を育てて繭を出荷）と蚕種業（蚕の人工交配や蚕卵の売買）とがありますが、桑折はその両方の生産が、伏黒や梁川と並んで江戸時代から盛んな地方でした。

伊達地方の蚕種は「奥州本場蚕種」として全国に販売され、ある時期は輸出もされました。とくに伊達崎村での生産が盛んでした。蚕種では、病気に強い品種を作ることが大切で、伊達崎では長年かけて改良してつぎつぎに良い品種を生産することで有名でした。安政七年（一八六〇）にまとめられた「蚕種名鑑」には、伊達郡の生

6 旧伊達郡役所と桑折の近代化

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

伊達新打	伊達郡之部	遠石氏本因
龜岡源四郎 龜房	龜岡六右衛門	
岩野松石 信吉之郎 不繼	石嶋吉次	
後藤新太郎 後長	後藤五郎	
後藤新藏		
同喜新輝	位新 佐藤新衛門 ○又 信朝 佐藤七五郎 實美盛 同上郎	菊田源登門 國澤屋敷七
八卷藤左衛門 孫甲	八卷彌六	
中吉 八卷吉之丞 大高	大坂力三	
六甲 大坂井也衛 儀中	大坂儀典衛	

万延元年（1860）に中井閑民がまとめた「蚕種名鑑」

孵化 季節は春、夏、秋、晩秋、晩々秋。
 脱皮 各脱皮ごとに一齡、二齡……という。
 したたて 蚕座（ワラダ）にたまつた桑
 の食べ残しやフンを取り除く作業。
 上簇 成熟した蚕を、繭をつくるための
 器（まぶし）に移す作業。

産者として、伊達崎村の「亀源」や桑折駅の「佐新」などのように商票を掲げた者が一八名も掲載されています。

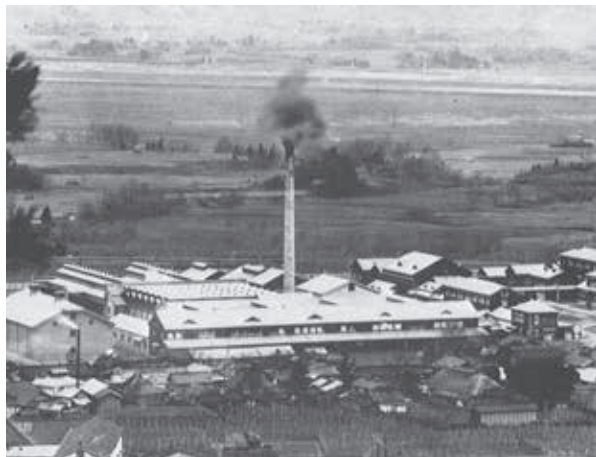
蚕の飼育は、各農家で大きな部屋や用具を消毒することから始まります。年に数回、季節に合わせて蚕種から孵化させ、四回脱皮させて五齡で繭を作る時期を迎えます。一日六、七回も餌の桑を与えなくてはならないので、家族総出で仕事を続けていました。それでも手が足りない場合は、人を雇って「桑積み、したたて、上簇、繭取り」など一連の作業を大勢でやっていました。

大工場による製糸業の盛衰

明治から昭和初期にかけては、生糸が重要な輸出品となり、製糸業が発展しました。大正時代に東北で最初、全国でも七番目に日本銀行支店が福島にできたのも、製糸業の発展によるものでした。

昭和八年（一九三三）には巨大な煙突のある郡是製糸工場が桑折町に進出し、五百名以上の従業員を抱えるとともに、工場内に女学院を設立し、女子に教育と労働の機会を与えました。その後、小国蚕糸興業も進出するなど、二つの工場の女性従業員で桑折町は賑わっていた時代がありました。しかし、化学繊維の発達などの影響もあつて著しく衰退し、現在桑折町では製糸業は営まれていません。

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



都是製糸工場 昭和8年（1933）開業

鈴木健弘博士 博士の母は文字を書けなかったが、蚕種紙の裏に楷古をし、離れて暮らす博士に手紙を送っていたという。博士が海外留学の折には、野口英世と同船だったといわれている。また、皇居の御養蚕所に参内し、皇后の飼育の世話係を務めたこともあった。

養蚕業が盛んだったころ

蚕の飼育が始まる時節、霜害で桑がだめになることもありましたが、平沢山などの傾斜地は霜害がないので、桑畑が多く、桑の葉を摘んで売っていた時代もありました。

昭和天皇は都是製糸工場を、皇后が伊達崎の養蚕家を視察され、それを記念して「蚕祖神」の記念碑が建立されました。

御免町出身の鈴木健弘博士は、蚕の疫病で苦勞する農家を見て、その予防を思い立ち、東京大学に学んだのち、現在の京都繊維工芸大学で蚕の疫病研究に没頭しました。

養蚕基地・桑折の名残り

現在、桑畑はありませんが、半田沼の水位が下がる時期は、桑の木の間隙が湖底から姿を現し、ほうぼうの畑の畔に桑の木が残っているのを見ることができます。

また、伊達崎では、かつて養蚕家だった大きな家が見られるほか、桑折のまちなかの商店街には、繭を取り扱う問屋の建物がいくつか残っています。二階に窓のない蔵があったら、それが蚕問屋です。

6 旧伊達郡役所と桑折の近代化

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



大正時代の桑折本町通り
桑折御蔵付近から伊達郡役所方向を望む

桑折三方道路
71ページ参照



まちなかに残る蚕問屋
中学生との蔵めぐり

23 蔵の町桑折

江戸時代から宿場町や半田銀山で賑わいをみせていた桑折町は、明治になって伊達郡役所の誘致にも成功し、伊達郡の中心としてさらに賑わいを見えるようになりました。

奥州街道が東北地方の幹線道路としての役割を担い、桑折と周辺地域とを結ぶ桑折三方道路が整備されたことで、桑折は周辺の農村部との交通の中心地となっていました。

また、明治二〇年（一八八七）の桑折駅開業、明治四〇年代における電灯の点灯、電信・電話の開設などは、生活の大きな変化を生じさせ、それに伴って商業や製造業も活況をみせるようになりました。米穀商、農蚕具・農蚕肥料商、蚕物屋、酒造業などが盛んになりました。桑折のまちなかには数多くの蔵が建ち並ぶようになりました。

24 べこ市場

昭和四年（一九二九）、伊達郡畜牛改良組合が設立され、第一回仔牛せり市が郡農会（現在の旧伊達郡役所）の庭で開催されました。農家の副収入に好適であったため、その後飼育希望者が増えています。

6 旧伊達郡役所と桑折の近代化

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



畜牛改良組合のせり市

べこ市の売上 一、三〇〇頭で総額
 三六万円であれば、一頭あたり二七七
 円。昭和一四年当時は白米一〇キロが
 二円四九銭〜三円二五銭。
 緬羊 毛用の家畜の羊。

ました。

そして、西段一〇番地に市場が建設されることが決定し、昭和
 一四年（一九三九）に家畜市場ができました。せり市は、年四回開
 催され、年間一、三〇〇頭も出場し、売上総額は三六万円にも達しま
 した。

改良組合は昭和一七年（一九四二）には福島県伊達郡畜産組合と
 なり、事業を拡大して豚も扱うようになりました。

戦中と戦後の数年間は、農業会が畜産の指導やせり市の開催を行
 なっていました。昭和三年（一九四八）に、伊達郡畜産農業協
 同組合連合会が新たに組織され、牛のほかは緬羊や山羊のせりも行
 なわれるようになりました。また、昭和天皇が東北各地巡幸の際に、
 緬羊のせり市を視察されました。

その後、昭和三七年（一九六二）ごろには、外国産の緬羊の輸入
 や化学繊維の普及により緬羊の扱いが激減しました。昭和五三年
 （一九七八）には、和牛・仔牛のせり市は頭数の減少により、安達畜
 産組合に委託することになり、桑折町での五〇年のべこ市場の歴史
 は幕を下ろしました。

6 旧伊達郡役所と桑折の近代化

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



三元車（トヨタテクノミュージアム所蔵）



初代鈴木三元

鈴木三元 文化二年（一八一五）
 明治三年（一八九〇）
 三元車 現在、トヨタコレクシヨンの
 ひとつとして、トヨタテクノミュージ
 アム産業技術記念館に収蔵されている。

25 三三車 さんげんしゃ

今では当たり前のように利用されている自転車ですが、現代のよ
 うな形になるまでには、約二百年もの長い間、多くの人々の苦心や
 研究が重ねられてきたのです。

桑折町には、日本にまだ自転車普及していない時代に、熱心に
 新しい交通手段の開発に力を注いだ人物がいました。初代鈴木三元
 がその人です。

三元が自走車の製作を思い立ったころは、大変多忙な毎日を送っ
 ていました。そんな中、自分の役割を果たしながらも、自走車を作
 ることを昼も夜も考え続けました。そのころの日本には、自走車に
 ついての情報や技術などはありませんでしたが、地元の大工や鍛冶
 屋と話し合つて、製作を進めていきました。

三元は長期にわたる自走車の製作過程を、細かく日誌に書き記し
 ていて、彼らが一生懸命考えていた様子が伝わってきます。

三元車の完成と博覧会への出展

三元は苦労を重ねながらも、明治二年（一八七九）に、一人乗り「自
 走車・大河」と二人乗り「自在車」を完成させ、「三元車」と名付け



鈴木三元の日記

ました。その後、改良を重ねて四人乗り「奔走車」^{ほんそうしや}も作られました。価格は一人乗りが二六円、二人乗りが三〇円、四人乗りが四〇円と、米一俵^{びやう}（六〇キロ）三円の時代にあつて、非常に高価なものでした。明治一四年（一八八一）三月一日から六月末まで上野で開かれた内国勸業博覧会に一人乗りと二人乗りの三元車を出品しました。評判は上々で、政府の高官だった板垣退助が来場して三元車に試乗し、不忍池を一周したこともありました。

現在桑折町在住の五代目三元氏の話によると、桑折と藤田との間を、客を乗せて運行していたこともあったそうです。

26 桑折駅物語

明治二〇年（一八八七）桑折駅オープン

「日本鉄道会社」によって、明治一九年（一八八六）に未着工の福島^{しおか}塩釜間の敷設工事が始まり、明治二〇年二月一日、福島^{せんだい}仙台塩釜間が開通しました。桑折駅もこのときにオープンし、遠方まで汽車で行けるようになりました。鉄道の時代を迎えたのです。

現在は電化されていますが、最初は単線の蒸気機関車で、上野と仙台間の所要時間は一二時間二〇分でした。福島から東京へは、昭

鉄道の歴史

明治 五年（一八七二）

品川〜横浜間鉄道開通

明治 一八年（一八八五）

大宮〜宇都宮間開通

明治 一九年（一八八六）

宇都宮〜黒磯間開通

明治 二〇年（一八八七）

上野〜塩釜間開通（桑折駅開業）

明治 二四年（一八九一）

上野〜青森間全通

昭和 三九年（一九六四）

東海道新幹線 東京〜新大阪間開通

昭和 五七年（一九八二）

東北新幹線 大宮〜盛岡間開通

昭和 五九年（一九八四）

経営合理化で桑折駅長、赤帽が姿を消す

昭和 六二年（一九八七）

国鉄民営化 J R 発足

平成 三年（一九九一）

東北新幹線 東京駅乗り入れ開業

和三〇年代までは夜行列車で福島を午後一〇時ごろ出発し、上野に朝六時ごろ到着、所要時間は約八時間でした。江戸時代は歩いて江戸まで七日から九日かかり、明治の初めは馬車で四日かかって桑折に着いた記録があります。

福島より北の鉄道敷設においては、桑折から厚樫山の麓を通過するところが急勾配で、当時の蒸気機関車の馬力では難がありました。

阿武隈川の東部では養蚕が盛んで桑畑が多かったので、汽車からの灰や煙害を心配する声があり、また、葦屋根が一般的だったために火災に対する警戒などから、鉄道敷設反対の意見が強かったようでした。当時、桑折には郡役所が置かれていたこともあり、桑折側への機運が傾いたのでしょうか、現在はその恩恵を受けているわけです。

鉄道が開通すると、煙を吐きながら走る勇壮な蒸気機関車を見ようと、南半田の八幡様の小高い場所は見物の名所で、驚きの声を上げて見物する人たちが大勢いました。川東方面からは、親類の家に泊まりがけで見物に来る人もいたほどでした。

駅周辺の変化

桑折駅は福島駅のあとに開業し、瀬上（現在は東福島）、伊達、藤田の駅はずつとあとになってからの設置でした。桑折駅は福島県最

6 旧伊達郡役所と桑折の近代化

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----



昭和初期ころの
桑折駅前通り

北端^{ほくたん}の駅として大きな役割を担い、桑折以外の阿武隈川の東部からも多くの人たちが利用していました。

一面の畑だった駅周辺には建物がつぎつぎにでき、開発ブームが到来^{とらい}しました。駅員は、昭和二〇年代前半までは三〇人あまり配置されていたので、鉄道関係の官舎が駅の両側にいくつも並び、前の通りには駄菓子屋^{だかし}、宿屋^{しゆく}、呉服屋^{ごふく}、銭湯^{せんとう}まで開業していました。

現在は人の乗降^{じようかう}だけですが、以前は大量の貨物も取り扱っていたので、運送店や倉庫も建ち並びました。貨物専用の引き込み線^{ひきこみせん}があり、そこから当時盛んだった蚕糸類や米、そのほか地域の産物などを積み込み、また、送られてきた貨物を配送していたので、馬車や大八車^{だいはちぐるま}の列ができ、駅前は大混雑^{こんざつ}していました。

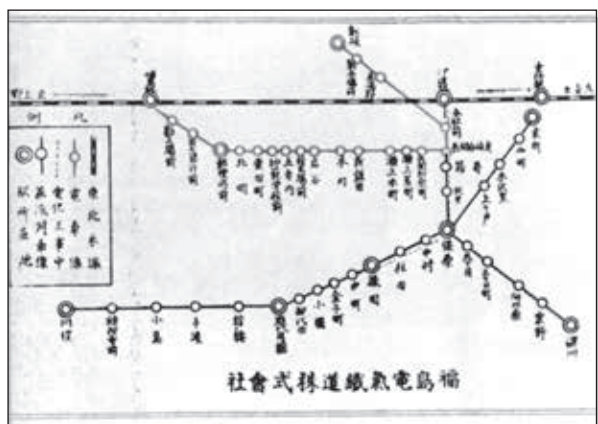
駅前にあった丸万運送店^{まるまんうんそうてん}は、大正二年（一九一三）にアメリカからT型フォードトラック五台を購入^{かうゆ}して運送業を経営^{けいえい}していました。このトラックは、福島県内の登録第一号といわれています。

駅からの大通りは、現在はイチョウ並木ですが、最初はヤナギが植えられていました。駅の脇^{わき}には井戸があつて、官舎の生活用水としての利用のほか、乗降客も使い、馬にも飲ませていました。

駅員が一人という現在の状況^{じようきう}からは想像^{さうぞう}できないほど、賑わう桑折駅の風景があつたのです。

6 旧伊達郡役所と桑折の近代化

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



信達軌道路線図



信達軌道機関車

以降、さまざまな変遷を経て、平成一八年（二〇〇六）には駅前広場も整備され、現在に至っています。

また、見慣れてしまうと気がつきませんが、桑折駅は在来線と東北新幹線の線路が隣接し、ほぼ同じ高さで並列して走っているのが特徴の、全国でも珍しい駅です。

軽便鉄道と馬車トロッキ

現在の駅前広場のロータリーあたりには、大正九年（一九二〇）に開業した軽便鉄道の信達軌道の駅がありました。桑折から西町、本伏黒、上ヶ戸、保原といった停留所が設けられ、小型蒸気機関車が走っていたのです。この路線は保原方面へは便利だったのですが、大正九年から昭和元年（一九二六）までと短期間で廃止されました。

もうひとつは馬車トロッキです。駅の西側に、半田銀山専用の引き込み線があった時期がありました。半田銀山の鉱石をほかの精錬所に運ぶため、トロッキを馬にひかせてここまで運び、列車へ積み込んでいました。

このように、小さな駅でもいろいろな変遷があったのです。

6 旧伊達郡役所と桑折の近代化

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



桑折町案内図 信達軌道の線路や西根上堰のほか、温泉通りに温泉記号や蕨市場などが記されている

27 桑折三方道路

明治一五年（一八八二）に三島通庸が福島県令に着任し、会津三方道路と呼ばれる三つの道路建設に着手しました。しかし、時を同じくして、桑折町にも三方道路ができたことはあまり知られていません。この道路整備は、土地提供（買収費）と建設費（労務費と資材費）をすべて地元で強いるというものであり、自由民権運動の弾圧という側面があったともいわれています。

この時代に整備された桑折三方道路は、梁川新道、保原新道、飯坂街道の3つです。保原新道は、大正六年（一九一七）に大正橋ができてからは、一部が付け替えられて新保原街道となりました。

飯坂街道の歴史は古く、松尾芭蕉が通った道としても知られていましたが、明治一七（一八八四）、桑折から湯野までの旧道を廃止し、飯坂十綱橋まで新道を開削することとなりました。この工事では、産ヶ沢川を渡り、東北本線の踏切を通って松原字柳沢前までが、桑折村・万正寺村・成田村・松原村の担当でした。

6 旧伊達郡役所と桑折の近代化

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



当時の桑折温泉

桑折温泉 昭和四年（一九二九）の福島民報新聞の広告欄「温泉投票入選名湯案内」に、飯坂、高湯、土湯、東山など県内の名湯や山形の温泉など二〇か所の中に「脊髄婦人病リュウマチの名湯桑折温泉」と出ていることから、当時は町の名所であったことがうかがえる。なお、平成六年開業の「桑折温泉つづかの湯」は、産ヶ沢川上流でボーリングをした新たな温泉を利用している。

28 桑折温泉と温泉通り おんせん

上町丁字路から西に向かう比較的広い一直線の道路を、「温泉通り」と呼びます。なぜこんな名前なのか、それは、この道を西に進み、線路を過ぎた産ヶ沢川沿いに温泉が湧き出ているからなのです。

明治四五年（一九一二）に大沼平兵衛らによって源泉が発見され、万正寺七曲で「桑折温泉」として、佐藤旅館と旭館の二軒が営業していました。西大隅あたりの温泉通りには共同浴場猪牙の湯や金茂旅館など、この温泉を利用した施設が建ち並んでいました。

他市町村からの利用者も多く、役場や工場などの宴会の会場として、また戦争中は、徴兵検査や児童疎開の宿泊場所としても使われました。

当時の温泉通りにはサクラ並木があり、坂町観音への参道でもありました。この通りには繭市場が開かれ、歓楽街もできました。「温泉通り」の名にふさわしく、賑わっていました。

猪牙の湯は昭和四六年（一九七二）ころまで営業していました。今も湧き出る温泉は、老人福祉センター「大かや園」で利用されています。

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

桑折を
愛した人々

西山城跡を背景に舞う産ヶ沢のホタル





絵馬 田村將軍蝦夷退治図（観音寺所蔵）

29 桑折をつくってきた人々

桑折の歴史に最初に名を残した英雄―赤頭太郎

赤頭太郎は八世紀後半（天平→延暦）の人です。今の北半田赤瀬地区（半田銀山史跡公園付近）に本拠を構えた領袖でした。体は熊のように大きく力は山を動かしたと伝えられています。正義の人だったので、領民から慕われていました。その勢力範囲は伊達・信夫の北半分に及んでいました。本拠は赤頭館と呼ばれ、領外からの侵入者を追い払い、領民の平和を守っていました。赤頭太郎は川に沿って南に道を造り、山越えに陸前（宮城県）や羽前（山形県）への道も定めました。これが後年の街道の基礎となったのです。

当時の奥州（東北地方）は文化も豊かでしたが、朝廷からは未開の地、蝦夷と呼ばれ蔑まれていました。朝廷は蝦夷の金や毛皮などの産物を欲しがり、蝦夷を支配しようとして圧力をかけてきました。度重なる無理難題に耐えかね、宝亀一〇年（七八〇）、奥州の豪族の雄・アテルイがついに立ち上がりました。奥州全土に及び、反乱とされたこの戦いは、奥州にとっては正義の戦いだったのです。政府軍は坂上田村麻呂を大將軍として奥州に出軍、延暦二年（八〇二）の戦いでアテルイは騙され、降伏してしまいます。延暦二三年

7 桑折を愛した人々

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----



大丈夫 立派な男子。偉丈夫ともいう。

赤頭太郎にまつわる赤瀬の大力ヤ
大木の足もとに祠が見える

(八〇四)、田村麻呂は再び北征します。その兵力は数万にものぼり、滝根の大多鬼丸も敗れ、住民もひどい目にあいます。

これを伝え聞いた赤頭太郎は、領民の安全を条件に自ら降伏します。捕らえられた赤頭太郎は、現在の半田銀山史跡公園の一角にあたる吉田川の畔で首を切られました。延暦二四年(八〇五)といわれています。吉田川の水は赤頭太郎の血で真赤になり、その下流の地区は赤川と呼ばれるようになりました。領民がその死を悼み日夜泣き叫んでいたのも、田村麻呂は崇りを恐れて神社を建立し、領民を慰撫しました。人々は赤頭大明神として崇めました。

後年、赤頭太郎は朝廷に敵対したとの理由で鬼、逆賊、山賊などと喧伝されることになりました。しかし、赤頭太郎は決してそんな悪人ではありません。むしろ、すばらしい大丈夫だったのですが、源義経問題を抱えていた鎌倉幕府は、伊達氏に赤頭大

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



植宗が居を構えた西山城跡



伊達植宗肖像

明神を益子神社と改めさせます。「益子」の名の由来には諸説あります。

昭和になって東北高速道路建設の折、北半田字松木田地内の祠を調査発掘すると、馬のような大きな歯がついた頭蓋骨が出てきました。歯は上下三二本あり「この頭骨は人間のものに違いがない。言い伝えのとおり赤頭太郎に違いない」と土地の人々は信じています。

赤頭館跡は銀山開発や半田沼の決壊水害、高速道路整備、農地整理などで見えるかげもありますが、北半田赤瀬に明神さまと呼ばれる祠や力ヤの大木など、わずかに痕跡が残っています。

桑折の基礎をつくった人物―伊達植宗

伊達氏の十四代植宗は、この地方で頭角を現し、幕府から陸奥国守護職に任命されるほどでした。しかし、植宗の望みはさらに上の奥州探題だったようで、幕府から一目置かれるほど、奥州での勢力を誇っていました。

植宗は本拠地を梁川から桑折へ移すため、西館と中館を二つ並べた西山城を天文元年（一五三三）に築き、併せてまちづくりも推進し、桑折の原形を形成していきましました。

また、円滑な裁判を行う取り決めとして分国法の「塵芥集」を定め、

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



佐藤新右衛門墓所（大安寺）



佐藤新右衛門



古河善兵衛

古河善兵衛 一六三七年
佐藤新右衛門 一六三七年

年貢取り立て台帳の「段銭帳」を整えるなど、さまざまな施策を打ち出し、支配体制を固めました。また、自分の子を周辺の領国と養子縁組をつぎつぎに行い、勢力の拡大も図っていました。

西根堰建設功労者―古河善兵衛と佐藤新右衛門

西根堰は米沢藩主上杉氏によって江戸初期に開削されましたが、この大事業にあたっては、古河善兵衛重吉と佐藤新右衛門家忠の二人が大きな働きをしました。

佐藤は西根郷出身で、上杉氏が会津から米沢へ転封されからは大肝煎（村役人）として伊達・信夫領において殖産を奨励し、農民の生活のために尽力した人物です。西根下堰の開削にあたっては計画を立案し、元和四年（一六一八）の春から同年暮れまでという、きわめて短い期間で完成させました。佐藤はこの功により、寛永七年（一六三〇）に米沢惣奉行より恩賞を与えられました。

福島奉行で福島郡代を兼任していた古河は、佐藤から西根上堰開削の相談を受けました。古河は佐藤とともに米沢藩主定勝に請願を繰り返し、古河が私財を投じることによって許可を得ました。

中級武士であった古河に、当時五万両を要したといわれるこの大事業をやり遂げる財力があつたとは考えられず、やむを得ず藩の公

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



無能上人像

無能上人 一六八三〜一七一九年
相承 弟子が師から、子が親から、学問・
技芸・法などを次々に受け継ぐこと。
常座不臥 一日中寝ずに座り続けるこ
と。

金を工事費に充てたともいわれています。完成後、ついに藩主の知るところとなり、米沢出府のうえ申し開きを命ぜられます。古河は米沢に向かう途中の板谷街道・李平宿で、西根堰開削の功を賞して贈られた短刀・月山丸で切腹したと伝えられています。のちに、佐藤と古河は郷社・西根神社の祭神となり祀られています。

修行と布教の生涯―無能上人

無能上人は天和三年（一六八三）に石川郡須釜郷に生まれ、一七歳のときに桑折大安寺に入り、得度し、江戸増上寺や羽州亀山文殊、成田山などで学び、二三歳で専称寺良通によって宗戒兩脈を相承して僧侶となりました。僧侶となった二年後の二六歳以降、「常座不臥」や「念仏日課十万称」などの修行を重ねました。三二歳で男根を断ち、その翌年の正月元旦から七日までに百万遍の念仏を行うなど、修行に明け暮れました。その生涯を閉じたのは享保四年（二七一九）、三七歳でした。

無能は寺院の建立もせず、武士や有力者とのつながりも持たず、食事のときも数珠を離さず、沐浴のときにも念仏を唱えていたといえます。その凄まじいまでの修行のため、無能への畏敬は広がり、信達地方はもとより、相馬・本宮・羽州村山地方にも布教活動は及

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



びました。

無能を師しと仰おほいだ不能上人ふのうは、無能の顕彰けんしょうに努め、無能を開祖かいそとして無能寺そぞけんを創建しました。

寛延かんえんの義民ぎみん―蓬田半左衛門よもぎだはんざえもん

寛延二年（一七四九）は天候不順で、作物が実らない凶作の年でした。農民は蓄えもなく、その日の食べ物にも困る有様であっても、年貢米は平年と同じように納めなければなりませんでした。

そこで、桑折代官所の領内の六八か村が、代官所に減免を願い出たところ、かえって増税を申し渡されたのです。そこで村々の農民が代官所に押しかけ、自分たちの窮状を訴えました。それが一揆という騒動となったのです。

当時、一揆を起せば重罪（じゆうざい）ということは誰もがわかっていました
が、餓死者（がししゃ）を出さないための最後の手段（しゆだん）でした。しかし、訴えは認（みと）
められませんでした。代官所は村々から代表を集め、誰が一揆（いっぴく）の首（くび）
謀者（ぼうしや）かを突きとめるために厳しい取り調べを続けましたが、名乗り
出る者はありませんでした。

あまりに厳しい取り調べが続けられるのを見かねて首謀者として名乗り出た三人の人物の中に、伊達崎の蓬田半左衛門がいました。

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

安齋惟長 一七〇三〜一七七二年

算額 数学の問答を絵馬風の額に記して堂宇などに掲げたもので、数学に関心のある人たちがこれを見て問題を解いたり、出題をしたりした。現代のインターネットのような働きをしていた。

半左衛門は、六八か村の人々を救うためその犠牲となって、ほかの二人とともに打ち首という重い刑に処されたのです。

こうしてみんなのために命を落とすことになった三人の霊を供養し、義民として後世に伝えるため、昭和五四年（一九七九）に、『寛延三義民顕彰記念碑』が、刑場だった産ヶ沢橋近くに建てられました。

和算の学者―安齋惟長

今から三百年あまり前に、追分の道標を建てた察誉寿観（安齋長右衛門）という人物に、惟長という数学に優れた息子がいました。江戸時代、数学は和算と呼ばれ、惟長は晩年江戸に出て、芝の愛宕山に算額を奉納しました。惟長が奉納した算額には、出題者の問い二問に解答したうえで、自らも一問出題しています。

やがて文化文政期に入ると和算への関心が高まり、会田安明らによって隆盛期を迎えますが、それに先んじて奉納された惟長の算額の内容が高度なものであったことから、当時この分野の先駆をなすものと指摘されています。

とにかく、江戸まで出かけて算額を奉納していることは、惟長の和算への造詣の深さを示すもので、当時の桑折にとっては貴重な人物であつたのです。

7 桑折を愛した人々

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----



高田菊太郎の墓

高田菊太郎

一八七四〜一九一五年

明治以降、和算は西洋から入ってきた数学に押されたこともあつて、惟長の詳しい資料が残されていないのが残念です。

半田山災害復旧に尽力ー高田菊太郎

町のシンボル半田山自然公園は緑に覆われ、美しい景観が私たちを楽しませてくれます。しかし、今から百年前に生じた大災害を克服し、復興を成し遂げた、住民の苦難の歴史がしみ込んでいることを忘れてはなりません。

それは明治四三年（一九一〇）夏、打ち続く豪雨によつて山が崩壊し、山肌は剥きだしになり、そのうえ、沼も決壊し、土石流で銀山集落を中心に、大きな被害を受けました。沼の畔にある碑にその惨状が「一木一草を残さず」と刻まれているとおり、家屋やその他の建物が流出、倒壊、埋没し、田畑、銀山関係施設へと、甚大な被害をおよぼしました。

経験したことの無い大災害に遭遇した村では、早速炊き出しなど応急の措置をとりましたが、何から手を着けたらよいかわからず術を失っていました。

そのようなときに、誰にもまねできない大活躍をし、復興に大きく貢献した人物がいました。温厚な性質の中に思慮深く、事に動じ

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

ない人物と信望の厚かった、高田菊太郎という三六歳の村会議員でした。菊太郎は「故郷の禿げ山を今に緑に変えてみせる」と、村の復興は植林からだと言信じ、活動を展開したのです。

山に木を植えるために、国有の山林を払い下げてもらおうと考え、何回もねばり強く県に陳情を続けたのです。自分の命を賭けての切羽詰まった県知事との交渉もあつて、ようやく半田山一帯の国有林四五〇町歩を、村へ無償払い下げにしてみらうことにこぎつけたのです。それは異例ともいふべき成果だったのです。

当時農村は疲弊していたこともあり、被害に遭った村の人々の働く場の確保を兼ね、山の地質に合った樹木の苗を準備して、植林事業を実施しました。やがて、村では復興に立ち上がった人々に支払う賃金にも困る状況となったため、菊太郎が私財を投じてまで植林できるようにしました。

不幸なことに菊太郎は、怪我がもとで半身不随となってしまうしたが、村の将来に想いを馳せ、活動を続けました。しかし大正四年、四二歳で夭折しました。

復旧工事が一段落した大正一五年（一九二六）、多くの村民が参加して大きな墓石と台座を運び「故高田菊太郎氏之墓大正一五年三月建立半田村」の銘を刻んだ墓標を建立しました。「桑折町誌」には「……

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----

矢吹琳堂 一八八五年

郷民その徳を敬慕し、相議つて墓前に碑を建て、長くその功德を讃えた」と記されています。

菊太郎をはじめ、地域の人々の苦節があつて、現在の豊かな緑の半田山自然公園ができあがったのです。

初等教育の礎を築いた人物―矢吹琳堂

矢吹琳堂は無能寺の第十世和尚です。山形の出身で、無能寺住職となつてからは近郷の人々から生き仏といわれるまでに称えられていました。文久元年（一八六一）宗祖法然上人の六百五十年祭には、芝増上寺大僧正と同道して江戸城へ参内し、十四代將軍家茂に謁見しています。

明治五年（一八七二）に学制が發布されると、田畑を提供し、戸長氏家喜四郎、医師梅津清平らと小学校設立に尽力しました。周辺の他村に先じて明治六年（一八七三）に現在の釀芳小学校の前身となる学知寮を創設しました。

30 桑折に江戸文化を花開かせた人々

街道や宿駅が整備された近世、奥州街道と羽州街道の追分もあつ

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

歌仙 連歌・俳諧で、長句と短句を交互に三六句連ねたもの。芭蕉以降盛んに行われた。

た桑折宿は、交通の要衝ようしゅうでした。人の往来おうらいや物の流通が盛んになると、文化も流入するようになります。とくに、江戸時代に流行した俳諧はいかいは、桑折の俳人田村不碩たむらふせきや佐藤馬耳さとうばみらによって根付いていきました。

松尾芭蕉は『奥の細道』の道中、元禄二年（一六八九）に桑折を通過しました。その前夜、飯坂温泉で雷鳴や雨音、蚤や蚊などに悩まされ、安眠できずに不快な思いをし、桑折を素通りして仙台へ出たという記述があります。

芭蕉の縁者（一説には甥ともいわれる）である俳人桃隣は、芭蕉の足跡をたどる旅をしました。往路は桑折を素通りしましたが、復路では不碩宅に逗留し、歌仙を催し、句集『むつちどり』を残しています。

この時代、和歌や連歌などの大名や武士の支配階級の文化から、産業の発展や交通の発達などを背景として、新しい勢力である商人や町人の文化、すなわち元禄文化へという流れが起きていました。街道の分岐のある宿として重要な位置にあった桑折にも、その影響は及んだのです。

元禄文化の代表として俳諧があげられますが、中央の芭蕉派の有名人が逗留して歌仙を開き、この時の句集に地元の不碩や馬耳の句も含まれることや、地元の俳人たちの句集や歌碑が数多く残された

7 桑折を愛した人々

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----

ことから、桑折に俳諧が広まっていたことをうかがい知ることができます。

田村不碩 一七一一年

検断役 江戸時代は大庄屋。

桑折文壇の先駆者―田村不碩

不碩は本名を田村茂左衛門房寿たむらもざえもんふさとしといい、桑折宿検断役茂左衛門喜記のりの次男として生まれました。

房寿は江戸で岡村不トおかむらふとくの門人となり、東柳軒不碩とうりゅうけんを名乗るようになります。不トは貞門派ていもんはの石田未得いしだみとくの弟子で、須賀川の相楽等さがらとく躬こうと兄弟弟子です。その不トの門人には柳川琴風やながわきんふうや立羽不角たちばふかくがいて、この不角が元禄六年（一六九三）に著した『年々草』あろわには、不碩が句を寄せています。これは、桑折俳人のものとしても、文献に残るものとしてはもともとも古い句です。江戸の元禄文化の風を桑折に伝えた最初の人物が、不碩だったといえるでしょう。

また、不碩は法円寺ほうえんじの素流そりゅうの協力を得て句会を催し、江戸の俳人たちとの交流をもち、それをもとに桑折の若い俳人たちをリードしていました。

佐藤馬耳（一六九四―一七五〇年） 佐

藤家は代々地元の有力者で、馬耳は西根堰開削者の一人である佐藤新右衛門家忠の五代孫にあたる。馬耳の時代には割元役わりもとぎのほかに本陣を経営し、西根堰見回上役なども兼ねていた。

割元役 地方行政にあたった村役人の最上位の者。代官・郡代など地方役人の指揮下で複数の村・庄屋しやうやを支配した。

割元総代。割元名主。大庄屋。

文化の媒介役―佐藤馬耳

佐藤佐五左衛門宗明さござえもんむねあきは、俳名を馬耳、歌名を柱碩ちゅうせきと称しました。

7 桑折を愛した人々

旧石器

縄文

弥生

古墳

飛鳥

奈良

平安

鎌倉

室町

安土桃山

江戸

明治

大正

昭和

平成



佐藤馬耳墓所（大安寺）



佐藤馬耳肖像

馬耳の「欖翠軒」はサロンの性格が強く、桑折における俳諧の発展に大きく寄与しました。

馬耳は、桑折を訪れる多くの文人と交流して、中央の文化を意欲的に吸収しました。また、参勤交代で本陣に逗留する大名との交流もありました。とくに仙台藩主五代吉村公との交流は深く、吉村公が桑折宿逗留の際は歌会を催し、馬耳が仙台へ出向いて文芸の道を深め合ったりしていたようです。そのため、吉村公から柱碩という雅号や、自筆の短冊、白銀一〇枚などを下賜されました。

馬耳の編著作物は『田植塚 乾』（享保四年（二七一九）刊）など一〇冊あまりにおよび、内容は俳諧・和歌・漢詩文とさまざまです。

『田植塚 乾』は法円寺での芭蕉追善の歌仙で、馬耳の序文のほか、全国から手向けの句が送られています。このとき、法円寺に建立された石碑は芭蕉塚としては東北地方最古のもので、芭蕉が須賀川で詠んだ「風流の初めや奥の田植歌」の短冊が埋められました。

馬耳の「欖翠軒」を訪れた中央の歌人・俳人は三〇名ほど確認されています。芭蕉の足跡をたどる歌人・俳人や、不顧ゆかりの俳人たちの来訪をきっかけに、「欖翠軒」はサロンとしての役割を担うようになったのです。

馬耳の功績としては、大名階級の俳諧や和歌、あるいは江戸の俳

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



柳の句碑

柳の句碑建立の由来

ト而翁 安永八己亥 夏五月

先生酒を好ミ且風雅を古のむ四とせ以前此街西酒客風人をのミ今年正月中の一日ゆくりなく身まかりける尔 高きも下たれも此人をなん惜さるはあらざる也 爱尔社中の友かきみつから石を荷ひ土を運ひてありの儘尔碑を建碑面尔柳の一句を記し 先生の高徳をあふき慕ふもの那るへし

桑折社中

※安永八年（一七七九年）

部分は不詳。

人たちの文化を受容し、地元桑折の町人とともに俳諧の同人を結成したことがあげられます。また、馬耳は桑折のみにとどまらず、近郊の農村、さらには東北地方にもさまざまな文化を広めていきました。その活動が土台となり、馬耳の死後、桑折に俳諧歌の華が開いたのです。

役人、事業者としての仕事を全うしつつ、同時にその立場を活かして桑折を中心とした信達地方や東北地方に俳諧を普及させたのが、馬耳の功績であるといえるでしょう。

桑折追分「柳の句碑」——ト而

現在追分には、「道標」「柳の句碑」「枝垂れ柳」「お休み処」「庚申塔」が復元され、桑折の歴史を今に伝える空間が再現されています。

「柳の句碑」には、ト而の「夕暮尔心の通婦柳哉（ゆうぐれにこのころのかようやなぎかな）」という句が刻まれ、その裏に句碑建立の由来が記されています。

この碑文から、ト而が地域の人々に親しまれ尊敬されていた人物であったことや、俳句の社中ができていることから、当時文芸が盛んであったことが察せられます。

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



安藤野雁墓所（大安寺）

狂歌 日常の身近なことを題材に、俗語を用い、しゃれや風刺をきかせた、こつけないな短歌。万葉集の戯笑歌、古今集の俳諧歌の系統で、江戸中期以後、特に流行した。ざれごとった。

俳諧歌 和歌の一体。用語または内容にこつけない味のある歌。古今集巻十九に多くみえる。ざれごとった。はいかいうた。

安藤野雁 一八一五〜一八六七年

狂歌・俳諧歌―愚鈍庵一徳

馬耳によって広められた俳諧を素地として、天明の狂歌黄金時代の影響を受け、桑折にも滑稽味を詠む狂歌・俳諧歌の華が咲きました。天保一一年（一八四〇）、桑折代官役人尾崎一徳こと愚鈍庵一徳は、喚友同盟披露歌合の案内を全国に発送しました。天保後期、俳諧歌も庶民の文芸の一つとして愛好される時代となっていたことを示しています。

一徳は江戸在勤のころ、古学・国学を修めた薄斎春村に俳諧歌を学び、天保一〇年、小名浜代官所より桑折代官所に赴任し、俳諧歌の普及にも努めました。

弘化四年（一八四七）、信夫文知摺観音に俳諧歌額「信達三十六歌仙」が納められました。このときすでに施主である一徳は没していたため、観音寺の子孫や当時の歌人、一徳の門弟などが集まり、先人たちの名を後世に残すべく奉納が行われたと考えられています。

国学者・歌人―安藤野雁

旧伊達郡役所敷地の北東奥に、昭和五四年（一九七九）に有志によって建てられた野雁の「去国歌」の歌碑と柳の太木があり、碑には「端寸八師国乎去名……」の原文が刻んであります。何と読むのかど

7 桑折を愛した人々

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----

去国歌

はしきやし 国を去らむな
 いま 今このわぎにはあらじ
 古へゆ かかりにけらし
 然れども しゑや惜らし
 古りにける 国にもありとも
 穿け杓を 脱き棄る如く
 打棄ては しゑや行かれず
 青駒を 草にとどめて
 道の隈 八十隈ごとに
 萬つ段 顧すれど
 天霧らふ 春の霞に
 家のあたり さやにもみえず
 青雲の たなびく日すら
 春雨に 涙は降りぬ
 見放れば 雲位に見ゆる
 走り出での 門辺に立てる
 青柳も 袖振るがごと
 木枝なびけり

※なお、種徳美術館には、野雁直筆の短歌などの作品が保管されている。

直 一目見てし君ゆゑ蜻蛉の
 もゆる春日を恋ひ渡らくも

んな意味なのかと、みんなとまどいますが、その左側に、成蹊大学遠藤宏教授による読みと訳文が示されています。五・七・五・七が、何回も繰り返され、最後は七・七で完結する、古代の万葉長歌形式です。声を出して何回も読んでみると、歌の調子のいいリズムが感じられます。そして、柳は野雁がこの「去国歌」の終わりに詠い込んでいる「青柳も袖振るがごと…」の情景から再現されたものです。

野雁は桑折代官所役人北村新兵衛の子で、文化一二年（一八一五）に桑折で生まれました。七歳のとき父が亡くなったので、寺西代官に引き取られ、文学の素養を受けました。一二歳で歌を詠み歌会の席に出るほど、文学の才能に恵まれた人物でした。

その後、瀬上の内池永年の門人となり、当時の多くの文人との交流を持ち、歌道を深めました。その後数奇な運命をたどり、中年になつてから関東諸国を流浪し、奇行の多い人物といわれましたが、長歌や短歌を多く残しています。歌風は独自の心境を率直に詠い、その題材には新規なものが見られます。

慶応三年（一八六七）の旧二月、故郷桑折を離れるとき、「去国歌」を永年宅に残し熊谷に赴いたのですが、翌月病気で急死しました。彼は自分の運命を予見していたのか、「去国歌」には、生まれ育った故郷との別れを惜しむ感情が切々と詠い込められています。

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安永	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



昭和53年の葛の松原

31

「葛の松原」を詠み継いできた人々

かつて、松原寺から南西に二キロメートルにわたって
 続いていたという「葛の松原」。筑前の「生の松原」や駿
 河の「三保の松原」などと並び称されていたと伝わって
 います。

現在はその面影も見あたりませんが、約八百年も前の
 平安の世のから、多くの歌人や俳人たちによって歌枕と
 して和歌に俳句にと詠み継がれてきました。

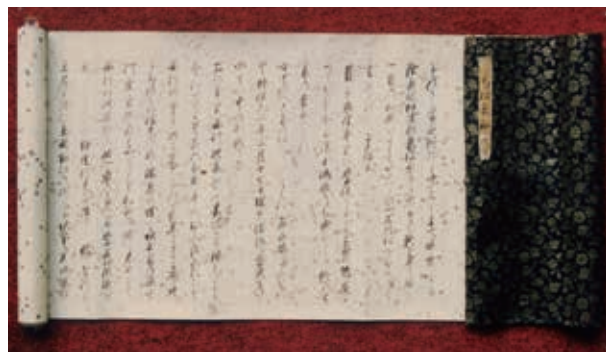
平安時代の覚英僧都から西行法師、江戸時代の松尾芭
 蕉、明治時代の正岡子規と、その時代を超えた文人たち
 のつながりは、桑折の「葛の松原」にあったのです。

覚英僧都を追った歌人たち

覚英僧都は東大寺で受戒した僧で、皇位継承の争いや
 僧兵と寺院との争いから逃れ、桑折に庵を結び、この地
 で没しました。

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



「葛松原和歌集」



覚英僧都入寂地の碑

覚英僧都
松平定信
く一一五七年
一七五九く七八二九年

なき跡も名こそ朽くせね 世にかけて 忍しのぶむかしの 葛の松原
世の中の人には葛の松原と 呼ばれる名こそ嬉うれしかりけり

その後、覚英僧都と同年代の西行法師が、奥州行脚あんぎやの折にここに立ち寄ったことが物語として伝えられています。「撰集抄せんじゅうしやう」によれば、寿永二年（一一八三）のこととされています。

その西行法師の足跡を追って旅に出たのが江戸の俳人松尾芭蕉です。桑折を通過したのは元禄二年（一六八九）でした。

覚英僧都の死後六百年経たった明和五年（一七六八）、福島藩士河原栄機えいきは、覚英僧都を称たたえた西行の歌集を読み、自らも僧都の徳を称えて葛の松原碑を建て、和歌集一卷を編あみました。

白河藩主・松平定信まつへらだのぶ

江戸時代、寛政かぜいの改革で知られる白河藩主・松平定信の歌にも「葛の松原」が詠みこまれています。

月日のみ ただいたずらに 送り来て 身の愚おろかさを 葛の松原
雨もよし あめなきときは 月をみる 心になにか くずの松原

7 桑折を愛した人々

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

正岡子規 一八六七～一九〇二年
 富安風生 一八八五～一九七一年



富安風生句碑



現在の松原中の茶屋

正岡子規と葛の松原中の茶屋

明治の文豪正岡子規が病身をおして旅に出たのは、やはり芭蕉の足跡を追ってのことで、桑折を訪れたのは明治二六年（一八九三）七月のことでした。

飯坂からの新道を人力車で桑折に向かう途中松原を通り、三軒あった茶屋のうち、真ん中の茶屋で一時間ほど休憩しました。そのときの様子を子規は「はて知らずの記」という紀行文に述べています。茶屋の老婆や嫁と会話し、土地の訛りを聞いて味わいがあると感じ、次の句を詠み、桑折の駅から汽車に乗ったと記されています。

人くずの 身は死にもせで 夏寒し 子規

また、ホトトギス派で「若葉」句集主幹の富安風生は、子規の吟行に倣って葛の松原を通りました。昭和一七年（一九四二）のことでした。桑折句会の門下生が建立した記念の句碑が、桑折中央公民館の玄関前にあります。

みちのくの 伊達の郡の 春田かな 風生

7 桑折を愛した人々

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----

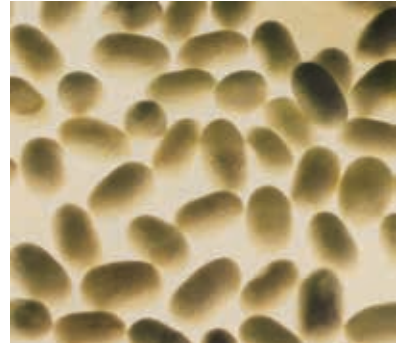
桑折御蔵





家族でモモの収穫

換金作物
現金などお金になる作物。



光を利用して選別されたまゆ玉

32 蚕業から果樹へ

「かいこさま」

「かいこさま」と親しまれてきた蚕業は、江戸、明治、大正、昭和と多くの農家を取り組み、「かいこさま」を育てる農家、生糸にする製糸業、糸を布にするはたおり業など、分業しながら大きな産業になりました。大正時代には東北で最初に日本銀行の支店が福島にできるほどで、横浜から外国へも輸出する産業になりました。桑折の蚕業も大変繁盛しましたが、農家にとっては労力のかかる大変な仕事であるにもかかわらず、働いた割には賃金が少なかったため、世の中の変化とともに魅力が失われていきました。大きな工場もあった折りでも、仕事が減っていききました。生糸を安く生産する国が出てきたり、絹織物の代わりに化学繊維の製品が出回ったりするようになり、換金作物としての産業ではなくなっていくたのです。

「サクランボ」「モモ」「リンゴ」

一方、果樹栽培は山形県からサクランボが入り、昭和初期には「ナポレオン」などの品種で山形をしのぐほどでしたが、戦後激減しました。



王林の原木



王林

リンゴの品種 昭和三〇年代の品種は「鳴子（祝）」「紅玉」「あさひ」「ゴールデン」「デリシャス」「印度」など。

モモは、阿武隈川流域の地区で大正時代から「福光」「水密」「大久保」などが盛んに栽培されました。農家の人たちは桑畑のあった土地などをうまく利用し、リンゴ、モモなどの果樹を取り入れてきました。養蚕のための桑の葉にリンゴやモモの消毒の農薬（消毒液）がかかると蚕に悪い影響を与えるため、さまざまな苦労を重ねて、果物を育ててきたのです。

33 王林と献上桃

桑折で誕生したリンゴ「王林」

まだリンゴの品種が少なかったころ、もっとおいしいリンゴを作りたいと品種の改良に取り組んだ人がいました。伊達崎の大槻只之助は、それまでの硬くて甘い「印度」とサクサクした「ゴールデンデリシャス」の二品種を組み合わせ、「王林」という食べやすく、おいしいリンゴを作り出しました。

「献上桃」と「ピーチロード」

糖度（甘さ）を測る光センサーを取り入れ、甘くておいしいモモを選別できるようにするなど、多くの人々の努力の結果、自慢でき

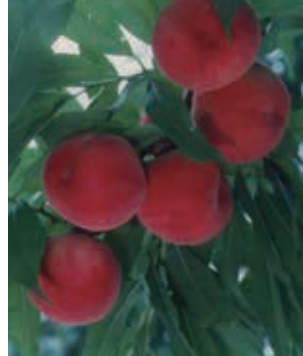
平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



ピーチロードをゆっくり歩こう会



モモの選果作業



あかつき

34 万正寺の大力ヤ

る果物が多く取れるようになり、大きな産業になりました。長年の努力の結果、桑折町のモモ「あかつき」を毎年献上できることは、農家の人々や桑折町にとって大変うれしいことです。

さらに、平成八年（一九九六）四月に皇太子ご夫妻がご来町の際に桃畑を散策し、見事な桃の花を鑑賞されました。また、皇太子ご夫妻が通られた道は、現在「ピーチロード」と名づけられ、毎年四月には、「ピーチロードをゆっくり歩こう会」が催されるなど、多くの人々に親しまれています。

ピンクに染まった「桃源郷」へバスで訪れる観光客も大勢います。

笠型に覆いかぶさるように広がる姿は、まさに日本一ともいわれる風格があります。樹齢は六百〜八百年ともいわれ、幹まわりは八メートルを超え、高さ一五メートル、枝の端から端までは三〇メートルもあり、美しく珍しい形をしています。昭和二八年（一九五三）に県の天然記念物に指定されました。現在も成長し続け、秋になると一面に実が落ち、香気が漂います。

この大力ヤの周囲から、明治の道路工事の際、「灰釉瓶子」と呼



万正寺の大力ヤ

昔話を掲載している本や資料

『桑折町史』

・半田沼の赤べこ（半田沼）

・咲かずの椿（妙蔵寺） など

『桑折ことば むかしばなし』

・半田沼の主（半田沼）

・曲松地蔵堂（下郡）

・天狗の相撲取り場（成田峠）

・孝子 松野善之丞（半田） など

ばれる一級品の陶器（とうき）の出土がありました。付近には戦国時代の伊達

氏居城（きよぐら）とされ、国の史跡に指定されている西山城跡（にしやまのしろのあと）や、初代朝宗（はつしろむね）の

墓（はか）、伊達五山（いだござん）の一つであつた観音寺（かんのんじ）などがあり、高貴な人物（こうき）と関わ

りがあつたものと考えられます。

鎌倉時代（かまくら）から現代までの歴史を見通してきた大力ヤは、私たちに

桑折の歴史をじっくりと伝えてくれる巨木です。

35 桑折のむかしばなしと民話

まだ世の中がゆったりとして自然を大切にしていたころ、子どもたちは家のまわりや里山の近くで、木の実や川や沼（ぬま）の生き物を捕（と）つて遊んだり、食べたりしていました。いろいろな野の花、食べ物、昆虫、里山の景色などから季節を感じ取っていました。みんなで里山の恵（めぐ）みを分けあつていたような感じでした。そういう時の流れの中で話をしてもらった、昔のこと、言い伝え、伝説は子ども心にもいりました。

「桑折町にはいっぺ民話があんだぞい。ちよこつとだけ話をしゃべつてみるから、聞いてくなんしょない」

そんな昔のことばのお話もじっくりと味わってみてください。

おせち料理

なます だいこんとにんじんの酢すの物。清らかな生活を祈願。

お煮しめ 鶏肉とりにく、昆布巻こぶまきき、ごぼう、

こんにゃく、にんじん。家族円満を祈願。

青豆あおまめと数の子 まめに達者たつしやで、子だ

くさんを祈願。

たつくり 小魚の佃煮。田畑の豊作

を祈願。

だんごさし 豊作、家内安全を祈願。

節分 「鬼は外、福は内」と豆を部屋

外にまく。歳としの数だけまめを食べる。

まゆだんご ぐず米の粉をだんごにし

てきなこをからめて食べた。

暮れや寒の時期のごちそう

酒かす汁 酒かすをととき、鮭さけ、だい

こんなどを入れた汁もの。

いかにんじん するめとにんじんを

細く切り、しょう油でつけ込む。

家庭の味

みそつけ 野菜を一度塩漬しおづけけにし、

塩を抜いてから、みそに漬けた。

36 食文化

私たちが今のような豊かな食事ができるようになったのは、ごく

最近のことです。日常は「汁一菜」というような粗食そしょくでありました。

「めし」と「汁しる」と「おかず」で、「おかず」はつけものなど一品の

ことがほとんどでした。ですから、お祝い事や正月やお祭り、農作

業の区切りなどの特別の日の食事がことのほか楽しみでした。

現在もつづいている行事食もあるので、家族の絆きずなや地域の深まり

を考えると、食という観点からヒントになるかもしれませんね。

主な行事食

おせち料理（正月） 縁起もので、健康、豊作などを願ったもの。

だんごさし ミズキの枝の先にしんこもちを刺さしたもの。

野の初め・農の初め 松送り、正月送り

暁参り（二月一四日） あずきがゆ

節分 ヒイラギの枝にいわしを刺して玄関に飾る。

節句 桃の節句（三月三日）にひしもち（草もち）を供え、端午

の節句（五月五日）に笹巻き（ちまき）を食べる。宵節句（五

つつなっとう 一つずつわらのつつ
こに入れ、むしろやかますで囲い、
もみがらに入れて発酵^{はっこう}させた。家庭
では、こたつに入れて作ったりした。
あまさけ こうじと米でつくった。

こうせん ほうろくで炒^いった大麦を
石臼^{いろうす}でひき、砂糖^{さとう}を少し入れて粉の
まま食べた。

きなこ 炒り豆を石臼でひき、さ
うをいれ、きなこちなどにして食
べた。

どぶろく 免許^{めんぎょ}がないと酒は造れな
いが、現金収入が少なかった時代は、
自家用に無許可で造ったものと思わ
れる。米とこうじで造った。

かたちもち ごまを入れたもちを油で
あげ、ふわっと大きくして食べる。

凍^こだいこん 寒の時期に寒気にさら
してつくる。干し方により「へそだい
こん」と切り干しだいこんとがある。

お祭り

かどいわし 春はにしのとれる季
節で、桑折ではにしんのことを「かど

月四日）には屋根に菖蒲^{しょうぶ}ともちぐさ（よもぎ）を飾り、風呂
にも菖蒲ともちぐさを入れる。

さなぶり（田植えの最中の食べ物）もち、おにぎり

小屋^{こや}（腹押^{はらお}さえ 虫押^{むしお}さえ）おにぎり、いも

お盆^{ぼん} 麩^ふ、切り昆布^{こんぶ}、ささぎ（いんげん）の煮物^{にもの}、だんご

月見 まめ名月（十五夜、旧暦八月）、いも名月（十三夜、旧暦九月）

暮^くれや寒^{かん}の時期のごちそう 酒かす汁、いかにんじん

各家庭で作った食べ物

甘酒、こうせん、きなこ、どぶろく、かたちもち、凍^こだいこん

お祭りのたべもの

春祭り（半田、伊達崎） 赤飯、かどいわし、昆布巻き、おひたし

夏祭り（桑折） 赤飯、昆布巻き、きんぴらごぼう、野菜の天ぷら、

きゅうりもみ（きゅうりの酢^すの物）

37 祭りと行事

身近な家の周りを見ると、小さな赤い鳥居^{とりい}に石の祠^{ほくら}のお稲荷^{いなり}さま、

いわし」とも呼び、まつりは「かどまつり」といわれた。かどいわしを焼いて振る舞ったり引き物に付けたりしたので、そう呼ばれた。

きゅうりもみ 「トントントントン」と調子良いまな板の音が隣の家から聞こえると「あつ、隣の家にお客さんがきたな」とわかったという。冷蔵庫がない時代、より新鮮なものでてもなそうという心の表れだったのだろう。

勧請 神仏の分身・分霊を他の地に移してまつること。

太鼓祇園囃子の曲

【若囃子】山車を曳く時の行進曲風の曲。

【祇園・八重桜】二曲続けて演奏。神社に御輿が到着し、お宮入りする際の奉納太鼓。アンダンテのテンポで優雅な曲。

また神社の境内には雷神、秋葉さま、庚申、湯殿山、巳待など、さまざまな碑を目にします。また、山手のほうでは愛宕、羽山といった古びた小さめの神社なども見かけます。

これらは、各家の屋敷神や昔からの集落の守り神です。祀る神はさまざまで、家内安全とか学問成就、疫病退散、農耕、火伏せ、雷風水神、山岳信仰、商売繁盛、養蚕、悪霊払い、軍神など、人々のそれぞれの身の丈に合った願いが込められています。いわれのある日には祭りを催してお祝いしていますが、祭りを通じて地域の結束を高める意味もありました。

神社の中には古くからのいわれのあるものや、勧請によって分神を祀っている例も多くあります。また、歴史上有名な人物や、地域の発展に貢献した人物が神として祀られた神社もあります。祀られている神の種類や、勧請された理由やいきさつなどから、当時の歴史や人々の祈りの拠り所を知ることができます。

太鼓祇園囃子

「文政年間に笠松という人物が京から伝えた。近在の祇園囃子の元祖は桑折で、ここから広まったものだ」とは、かつてこのお囃子の代表だった北半田の佐藤文吉さんのお話です。この縁起については

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

【じゃんぎり】速いテンポで軽快な曲。前奏に続いて三つの区切りと間奏、終曲の構成。小太鼓は八つの八分音符の一番目と四番目にアクセントがつく独特なリズム（下図）。大太鼓はこのリズムにのって、自由で見せ場のあるパフォーマンスを演じるので憧れの的。



【じょうりゅう】短い曲で出始めに「いっしょ」とかけ声をかける。

【赤豆黒豆】まめで達者でという縁起が含まれている。

【うさぎうさぎ】古民謡『うさぎうさぎ』の曲で、うさぎが飛び跳ねる動作で演奏。

【吾妻】祭りも終わりに近づくと、御輿がお宮入りのときに演奏する。一抹の寂しさを感じさせる曲。

言い伝えの域を脱しませんが、近在の祇園囃子の元祖は桑折だと信じて、誇りをもって伝承しています。この祇園囃子は、昭和四八年（一九七三）に桑折町無形文化財の第一号に指定されています。祇園囃子の各曲は大太鼓、小太鼓、笛、鉦などの構成で演奏され、最近の創作太鼓と違って派手さはないものの、伝承太鼓としての特色が感じられます。

諏訪神社

字名の諏訪にあり、町内では規模の大きな神社です。伊達家初代朝宗が信州の諏訪神社から勧請し、西山城に守り神として祀ったもので、一六世紀末に現在地に移したといわれます。祭礼は七月二七、二八日の夏祭りで、御輿と提灯を何段にも飾った山車五組が繰り出し、この中で祇園囃子を老若男女が競って演奏します。

八幡神社・益子神社

この二つの神社は半田地区にあつて、祭礼は四月十七、十八日（現在はこの日の近くの土・日）の春祭りで、御輿と屋根にやや大きな柿の木の枝に造花を飾りつけた八組の山車が繰り出し、地区内を御輿の先導で運行して祇園囃子が演奏されます。



諏訪神社の祭礼

また、益子神社のかつての御輿は、北半田の字一本木あたりにあった大きな池で入水渡御の儀式も行われていました。

熊野神社

大字伊達崎字宮の内にあり、遷宮式には、屋台が七台も勢揃いしたといわれます。祭礼は四月九日に行われます。熊野神社は紀州熊野を中心に全国に広まった神社の系統で、ほかの地区にもあります。

白山媛神社

精進潔斎の行 飲食をつつしみ身体を
清め汚れを避けること。

睦合小学校の裏の大字成田字天上庵にあつて、山麓の農耕に欠かせない水を恵む神として祀られています。かつて祭礼では村人が拝殿にこもり、精進潔斎の行が行われていました。近年、山車を新調し、春の祭礼には祇園囃子の演奏も行うようになりました。

38 地名・字名

桑折には、古代から使われている地名、地形を表す地名、また、

歴史に関わるいわれのある大字名や字名、人々に親しまれてきた地名が数多くあります。地名にどのような由来があったのか探つていくと、町の歴史や歩みがわかり、町への理解や愛着を深めることができます。地名は町の成り立ちと大きな関わりがあります。私たちは、歴史が宿る地名を訪ねることができるのです。

町の由来、伊達氏とのかかわりのある大字

桑折、上郡、下郡、万正寺、伊達崎

地形にかかわる大字

谷地、北半田、南半田、成田、松原、平沢

城郭、幕府、代官所などに関わる字名

館、陣屋、庫場、白銀、駒踏、一里壇、本町、上町、北町、西町、明星坂、往還端、大五輪、常陸、常陸館、駿河館、大榎坂町、化粧道、西館、中館、文吾館、小館、館ノ内、東館、本丸、大手先、中丸、仲丸、馬場、漆方、仲城、上城、内城、家老、古館、古館、下宿、元宿、中宿、新宿、馬場郷、西鍛冶町、蝦夷塚、御免町、追分、塚下、六角

水利に関わる字名

芝堤、堰合、堰上、下堰端、堰下、洞ノ口、堰向



睦合小学校 明治 32 年 (1899) に新築された独立校舎



桑折小学校 学知寮のあと、明治 9 年 (1876) に新築された堰上校舎



伊達崎小学校 明治 21 年 (1888) 新築、明治 32 年 (1899) 増築の西校舎 (左側) も写っている

39 学校

小学校

明治以前の桑折には、早くから寺子屋が開かれたといわれています。街道沿いの宿として多くの人や物が行き来し、また、代官所が置かれるなど信達地方における政治・経済の中心地であったため、教育も盛んだったようです。明治維新のころには、寺院や神社などに寺子屋がありました。

全国民が小学校に入る「学制」が定められたのは明治五年(一八七二)です。明治六年(一八七三)二月、無能寺の庫裏を利用して「学知寮」が開かれ、その後、桑折小学校として専用校舎ができました。

銀山や工房に関わる字名

銀山南、銀山西、銀山、銀山東、鍛冶屋敷、鍛冶屋沢、御免
まち、じょうばし、だいもんざき、じゅうふいち、さいこう、みずぬき、とさまち
町、女郎橋、大門先、十分一、再光、水抜、戸沢町

地形、名前に関わる字名

それぞれの大字に、山、沢、沼、田に関わる名前が多く見られます。とくに、伊達崎には「水」に関わる字名がたくさんあります。



昭和 35 ～ 40 年頃の釀芳中学校



龍眼木があったころの半田釀芳小学校
(昭和 15 年ころ)

伊達地区では第一号でした。当時は学校に通うのにはお金がかかり、通えない人々も多くいました。授業料がかからなくなったのは明治の半ばごろです。

睦合小学校、半田小学校、伊達崎小学校でも、いくつかの村が集まり、お寺などを校舎にして教育を始めました。

町村合併や新たな教育制度による学校の名前や学区の編成などさまざまな変遷を経て、現在桑折町内には釀芳、睦合、半田釀芳、伊達崎の四つの小学校があります。

中学校

戦後の教育制度の改革で、釀芳中学校、睦合中学校、半田中学校、伊達崎中学校が開設されました。それぞれの小学校の校舎を仮校舎としてのスタートでした。しかし、昭和三〇年（一九五五）の町村合併に伴って中学校も統合され、釀芳中学校だけになりました。

幼稚園

明治時代の終わりごろ、皇太子（大正天皇）の東北行啓記念として、釀芳幼稚園が開設されました。半田幼稚園は昭和四二年（一九六七）に、睦合幼稚園と伊達崎幼稚園は昭和四三年（一九六八）に設立され、

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



桑折醸芳高等学校



明治時代は戸長役場、昭和には高等女学校として使用されていた現・桑折カトリック教会。

各地区で幼稚園教育を受けることができました。

桑折醸芳高等学校

桑折町立の高等学校として、昭和三三年（一九五八）四月に開校しました。農業課程、家庭課程があり、修業年限は二年でした。当初は桑島の旧役場跡に校舎がありましたが、その後成田地区の旧陸合中学校校舎に移転しました。

青年教育

明治の中ごろ、小学校に行けない子どもたちのために、私立桑折学運館という夜間学校がありました。対象年齢は一〇歳以上三〇歳（女子は一五歳）以下でした。その後小学校教育が普及し、青年学校として引き継がれました。また、昭和の初めに女子部を独立して桑折家政女学校と改称し、桑折実科高等女学校、桑折高等女学校、そして、新制中学校に切り替わりました。

戦後の青年教育は、地域の公民館での青年学級がその役割を担いました。

8 暮らしの知恵と文化・風習

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



復元された追分



「街道まつり」

40 まちづくりへの新たな取り組み

戦国時代、江戸時代を通して、伊達家、上杉家、代官所、半田銀山など、多くの時と人が桑折町を通り過ぎていきました。

奥州街道と羽州街道の分岐点である追分おいわけがある桑折宿は、往時おうじ、参勤交代さんきんこうたいなどの人々の往来で賑にぎわっていました。宿場や古道が見直されている昨今さつこん、桑折宿は羽州街道の起点となることから各地の宿場町との連携れんけいを図り、「街道まつり」などを通して、かつての賑わいを体感、想像しながらまちづくりに取り組み始めています。

桑折宿「街道まつり」

桑折宿「街道まつり」は、商工会青年部が中心となって平成一七年（二〇〇五）より毎年開催されています。羽州街道の起点としての桑折町を広くアピールするために、羽州街道各地の宿場町と交流会などを行っています。街並みのよさの発掘、町の魅力発掘みりょはつくつによる活性化、振興しんこうを図っています。

「追分」の復元

羽州街道の起点を当時のまま復元しようと、住民が中心となって



左が現存、右が復元の三元車

古絵図などを参考にしながら勉強会を開催し、道標、枝垂れ柳、柳の句碑、休み処、庚申塔の五つの要素があつたことを突きとめました。平成一八年（二〇〇六）、県や町の協力を得てその復元を成し遂げました。この「追分」の復元は、その後のまちづくりの推進にとつての大きな原動力となりました。

まちづくり活動拠点としての「桑折御蔵」

桑折町女性団体連絡協議会が活動の拠点にする場所を探していたところ、取り壊し寸前の蔵が見つかりました。家主の協力を得て、県の助成を受けて修復を行った建物が「桑折御蔵」です。桑折御蔵は、「アンテナショップ」「おもてなし処」「観光案内」の3本柱で運営しています。

運営にあたっては、「元氣こおり本舗有限責任事業組合桑折御蔵」を設立し、女性団体連絡協議会のメンバーが主体となつて平成一九年（二〇〇七）から活動を始め、町内外からの多くの来訪客をもてなし、数多くのテレビなどの取材を受けるまでになりました。

「おもてなし処」として、地粉（桑折の粉）利用の「桑折さんちのだんご汁」が土曜日限定で味わえます。「朝採り野菜」など、安心、安全の地産地消などの試みもしています。

8 暮らしの知恵と文化・風習

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



三元車の復元図

「桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会」の活動

「桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会」は、現在四つの部会に分かれて活動しています。

町並み部会 桑折宿の町並み景観づくりを推進。

賑わい創出部会 「桑折宿軽トラ市」「カフェ図書」を開催。「桑折宿軽トラ市」は、平成二〇年（二〇〇八）から毎月一回定期的に開催しています。また、「カフェ図書」は古い商家を修復し、平成二一年（二〇〇九）から、「まゆたま」という名称で毎土曜日曜に営業をしています。

桑折学部会 桑折の歴史から学び、まちのよさを知るきっかけをつくる活動を実践。この冊子「桑折学のすすめ」の編集・発行も桑折学部会の活動のひとつです。

産ヶ沢流域環境部会 ホタルが飛び交う産ヶ沢川と町周辺の里山などを回遊できる環境づくりを推進しています。

現存最古の自転車「三元車」復活プロジェクト事業

日本最古の自転車である「三元車」は、初代鈴木三元の手により桑折町で生まれました。この三元車をまちづくりに活かそうという



やわらかな光を放つ竹灯籠



旧街道に温もりを灯した竹灯籠まつり

機運が高まり、町内外からの募金^{ぼきん}と町内の鉄工・木工技術者の志^{こころざし}によって、ついに念願の三元車が復元されました。そして、平成二年（二〇〇九）「三元車」展が旧伊達郡役所で開催され、復元された三元車とともに、トヨタテクノミュージアム産業技術記念館に保管されている三元車が里帰りを果たしました。

中学生と蔵めぐり

昔、蔵は倉庫としてだけでなく、店などとしても利用されていた。蚕^{さん}物屋（蚕種^{さんしゅ}、乾繭^{かんけん}扱いなど）、荒物屋（金物、竹製品、蓼^{れい}縄^{なわ}など）、呉服屋、造り酒屋などに使っていたそうです。中学生たちは、「しっかりと造られていてすばらしい」「今でもすごい」と感想を話していました。桑折の蚕業の歴史を表すものとして、残したいものですね。

「建設業の活力再生と街づくり推進協議会」の活動

建設業会員が、おもてなしの心を表現するために、桑折の竹を使って竹灯籠^{たけどうろう}や縁台^{えんだい}、門飾りなどを作り、商店街に飾りました。平成二年（二〇〇九）一〇月一七日には、竹灯籠まつりを開催し、旧伊達郡役所では竹灯籠を半田沼をイメージさせるハート形に並べ、

8 暮らしの知恵と文化・風習

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



紅葉の名所となっている陣屋の杜公園

点灯式を行いました。

陣屋の杜公園

陣屋の杜公園は、国道四号の仮屋交差点近くの高台にあります。

ここは、江戸時代に陣屋があった場所に隣接しています。かつては個人所有で「山八別荘」と呼ばれていた時期もありましたが、現在は町が管理しています。

「陣屋の杜」という名称は、公募によって決められたもので、町のイベント会場などとして、多くの町民に利用されています。

秋の紅葉が評判で、燃えるような色彩が町内外からの来訪者の目を楽ませています。ほかにも、春の桜、萌え出する若葉、眼下に広がる桃畑、夏のそよ風と、四季折々に訪れるたび心が癒される場所です。

また、江戸時代の国学者安藤野雁の、

引きよちて 折らば折らむ やすらひに

一葉二葉は散る 紅葉かな

太田良平 大正二年（1913）伊達市（旧梁川町）生まれの彫刻家。日展の審査員・評議員・参与など、彫塑界の重鎮として活躍。昭和三五年（1960）に桑折町の「桑外居」に居住。平成九年（1997）没。

これからのまちづくりにあたって『桑折町誌』の教育長遠藤勉氏の「発刊に寄せて」に「愛は理解を前提とする。わが町を愛し、わが町の将来を思うなら、町発展の歴史を理解することから始まる。過去は現在を生み育て、現在は将来への基盤となるからである」とある。歴史を知り、そこから新たな方向性を見いだすことの大切さを学ぶことができる。

の歌碑や、町在住だった太田良平作の像なども建っています。

ホタルの郷づくり

産ケ沢川は、萬歳楽山から半田山の西の真後ろを流れて藤倉ダムに注ぎ、藤倉ダムから下流は「桑折温泉うぶかの郷」や七曲を経て西根堰と交差し、阿武隈川に合流しています。

この産ケ沢流域でホタルの飛び交う郷づくりが進められ、夏の夜空をホタルが空高く舞う環境が戻りつつあります。現在は二か所でゲンジボタル、ヘイケボタルなどの乱舞を見ることができます。

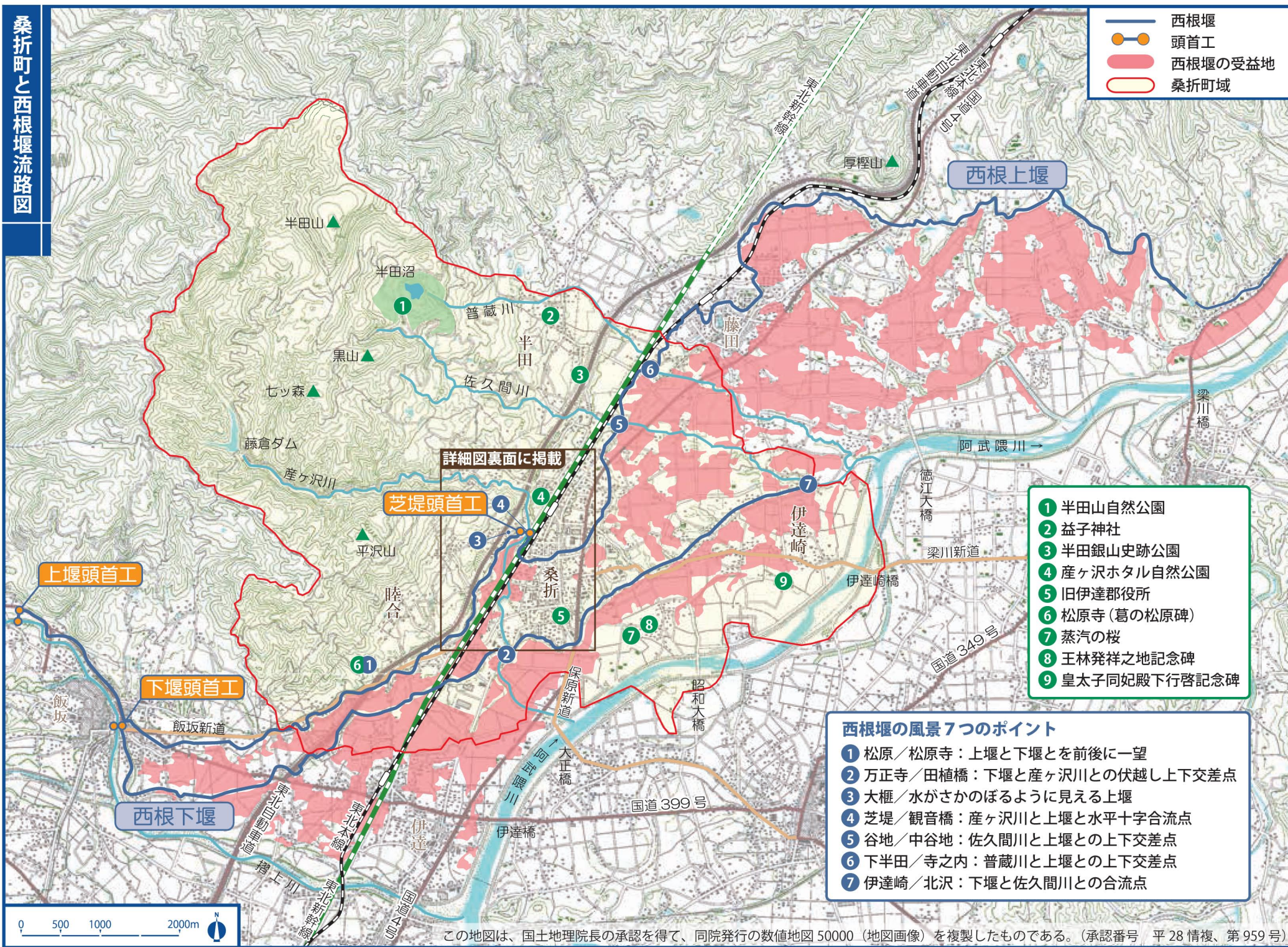
七ヶ宿・高畠・桑折の三県三町の交流も行われ、一か月以上ホタルが楽しめる、日本一のホタル鑑賞ゾーンづくりが始まっています。

「住んでよし、訪れてよし」の桑折町を創造しようと、多くの町民が関わってまちづくりに取り組んでいます。私たちの生活の質を高めるよう学び、桑折町に愛着を持ち、多くの人達に訪れてもらえるようなまちにしたいものです。

8 暮らしの知恵と文化・風習

旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----

桑折町と西根堰流路図



- 西山城に関わるスポット
- 歴史に関わるスポット
- まちづくりに関わるスポット
- 公園や自然に関わるスポット
- 街道など歴史に関わる道
- 西根堰



「桑折学」年表

本冊子の本文に掲載した事項とそれに関連することを年表形式にまとめたものです。そのため、ここには掲載されていない事項が数多くあります。桑折町史などを参照してください。

※半田銀山の算出量の単位は、貫（一貫＝3.75キログラム）

時期		桑折の出来事と人物	桑折の 為政者	半田銀山 産出量(貫)	世の中の出来事
西暦	元号				
802	延暦二一	前期東山道 後期東山道	伊達郡		奥州のアテルイ坂上田村麻呂に降伏
805	延暦二四				
807	大同二	半田銀山発見	伊達氏		
1157	保元二	覚英僧都 桑折で没する			
1171	承安元	平沢・平澤寺に経筒を埋める	信夫佐藤氏		
1183	寿永二	西行法師が桑折に立ち寄ったと伝わる			
1189	文治五	奥州藤原氏滅ぶ。このころ、伊達朝宗入部	伊達氏		
1402	応永九	九代伊達政宗 西山城籠城			
1532	天文元	十四代伊達植宗 居城を赤館城へ移す	伊達氏		
1536	天文五	植宗「塵芥集」を制定			
1542	天文一一	天文の乱起る	伊達氏		
1548	天文一七	天文の乱終結。伊達晴宗 米沢城へ本拠を移す			
1591	天正一九	蒲生氏郷 会津藩主伊達信夫支配	伊達氏		
1598	慶長三	上杉景勝 会津米沢伊達信夫刈田入封			
1601	慶長六	上杉景勝 米沢伊達信夫三十万石に減封	伊達氏		
1602	慶長七	奥州・羽州街道に一里塚整備			
1603	慶長八	佐藤新右衛門 西根下堰を開削	伊達氏		
1618	元和四				
1624	寛永元	古河善兵衛 西根上堰の開削に着手	伊達氏		
1661	寛文元	これ以前にも半田山での採鉱が行われていたと伝わる			
1664	寛文四	上杉氏十五万石に減封、伊達信夫は天領に	伊達氏		
1679	延宝七	本多忠国福島藩領(幻の西山城の天守閣)			
1682	天和二	本多忠国 播州姫路へ転封、天領に	伊達氏		
1686	貞享三	柘植伝兵衛 福島代官着任			
1689	元禄二	松尾芭蕉 桑折を通る	伊達氏		
1700	元禄一三	松平忠尚 桑折藩を興す			
1708	宝永五	察誉寿観 追分の道標を建立	伊達氏		
1711	宝永八	田村不碩 没			
1719	享保四	無能上人 没	伊達氏		
1723	享保八	野村勘左衛門による新鉱脈の発見・開発			
1747	延享四	佐渡金山奉行の支配下に	伊達氏		
1748	寛延元	幕府直轄に。桑折代官神山三郎左衛門 着任			
1749	寛延二	農民一揆発生	伊達氏		
1750	寛延三	義民蓬田半左衛門 処刑される			
1751	宝暦元	佐藤馬耳 没	伊達氏		
1754	宝暦四	小林孫四郎 桑折代官着任			
1756	宝暦六	河原栄機「葛松原和歌集」編集	伊達氏		
1760	宝暦一〇				
1768	明和五	安齋惟長 没	伊達氏		
1772	安永元	仙台藩預かり領となる			
1774	安永三	柳の句碑建立	伊達氏		
1776	安永五				
1779	安永八	竹内平右衛門 桑折代官着任	伊達氏		
1782	天明二				
1789	寛政元	仙台藩預かり領を幕府直轄に	伊達氏		
1800	寛政二	寛政元 桑折代官着任			
1804	文化元	幕領	伊達氏		
1807	文化四				
1810	文化七	幕領	伊達氏		
1814	文化一一				
1815	文化一二	鈴木三元 生、安藤野雁 生	伊達氏		
1827	文政一〇	寺西蔵太 桑折代官着任			

1989	昭和五	平成元	半田山自然公園、半田銀山史跡公園整備完了	1828	文政一	
1990	昭和五	昭和五	半田銀山の採掘権放棄、閉山	1830	天保元	
1991	昭和五	昭和五	半田銀山休山	1831	天保二	佐藤兵助（南部産鉄取引者）
1992	昭和七	昭和七	富安風生 葛の松原を訪れる	1833	天保四	安藤雅輝 生（1917）。代官黒田節兵衛の配下。銀山鉱石運搬業務に従事。のち、桑折初代助役、二代町長
1993	昭和七	昭和七		1837	天保八	島田帯刀 桑折代官着任
1994	昭和七	昭和七		1840	天保一一	愚鈍庵一徳 喚友同盟披露歌合の案内発送
1995	昭和九	昭和九	伊達郡畜牛改良組合設立	1844	弘化元	
1996	昭和九	昭和九	信達軽便鉄道廃止	1848	嘉永元	
1997	大正一	大正一		1849	嘉永二	
1998	大正一	大正一	丸万連送店県内トラック登録第一号	1850	嘉永三	
1999	大正二	大正二	信達軽便鉄道開業	1852	嘉永五	高田忠蔵 生（1906）。銀山鉱毒に関して鉱山当局と折衝解決
2000	明治四	明治四	桑折温泉源泉発見	1853	嘉永六	
2001	明治四	明治四	高田菊太郎 半田山沼の崩壊で窮状の村民を国有林払下げと植林、溜池の築設で雇用創出	1860	万延元	
2002	明治四	明治四	半田山大崩落・八月一六日半田沼決壊	1861	文久元	
2003	明治四	明治四	半田銀山の鉱石、日立鉱山に売却	1864	元治元	半田銀山 幕府経営の閉宮
2004	明治四	明治四	半田銀山専用の引き込み線完成	1865	慶応元	半田銀山休山（1866）
2005	明治四	明治四	半田山大崩壊（1903）	1867	慶応三	安藤野雁「去国歌」を残し死去
2006	明治六	明治六	正岡子規 桑折来訪	1868	明治元	早田伝之助 村民雇用のため半田銀山坑業を再開、失敗
2007	明治六	明治六	半田銀山ズリ山の立体交差橋（石垣の橋台）完成	1869	明治二	徳川領桑折陣屋閉庁 相馬藩に引き渡す
2008	明治七	明治七	半田銀山に県内初の水力発電所落成	1870	明治三	桑折県閉庁、福島県が生まれる
2009	明治七	明治七	旧伊達郡役所完成	1872	明治五	イギリス人ゴットフレが半田銀山を視察
2010	明治八	明治八	半田銀山史上最大の出鉱量	1873	明治六	矢吹琳堂 学知寮創設
2011	明治八	明治八	蒸気船就航	1874	明治七	五代友厚 半田銀山採掘再開（1944）
2012	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1876	明治九	福島県会津県平泉合併
2013	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1878	明治一一	明治天皇行幸。「醸芒」の名
2014	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1881	明治一四	郡区町村編成法により伊達郡行政区誕生
2015	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1883	明治一六	明治天皇再行幸「御蔭廼松」の名
2016	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1884	明治一七	内国勸業博覧会に三元車出品
2017	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1885	明治一八	旧伊達郡役所完成
2018	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1887	明治二〇	桑折駅開業
2019	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1893	明治二六	半田銀山に県内初の水力発電所落成
2020	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1901	明治三四	半田山大崩壊（1903）
2021	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1908	明治四一	このころ、横山某 半田山採掘に挑戦し成功。のち破産
2022	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1909	明治四二	半田銀山の鉱石、日立鉱山に売却
2023	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1910	明治四三	高田菊太郎 半田山沼の崩壊で窮状の村民を国有林払下げと植林、溜池の築設で雇用創出
2024	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1912	明治四五	桑折温泉源泉発見
2025	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1913	明治四六	丸万連送店県内トラック登録第一号
2026	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1914	明治四七	信達軽便鉄道開業
2027	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1915	明治四八	伊達郡畜牛改良組合設立
2028	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1916	明治四九	信達軽便鉄道廃止
2029	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1917	明治五〇	大正一
2030	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1918	明治五一	大正二
2031	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1919	明治五二	大正三
2032	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1920	明治五三	大正四
2033	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1921	明治五四	大正五
2034	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1922	明治五五	大正六
2035	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1923	明治五六	大正七
2036	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1924	明治五七	大正八
2037	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1925	明治五八	大正九
2038	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1926	明治五九	大正一〇
2039	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1927	明治六〇	大正一一
2040	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1928	明治六一	大正一二
2041	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1929	明治六二	大正一三
2042	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1930	明治六三	大正一四
2043	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1931	明治六四	大正一五
2044	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1932	明治六五	大正一六
2045	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1933	明治六六	大正一七
2046	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1934	明治六七	大正一八
2047	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1935	明治六八	大正一九
2048	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1936	明治六九	大正二〇
2049	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1937	明治七〇	大正二一
2050	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1938	明治七一	大正二二
2051	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1939	明治七二	大正二三
2052	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1940	明治七三	大正二四
2053	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1941	明治七四	大正二五
2054	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1942	明治七五	大正二六
2055	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1943	明治七六	大正二七
2056	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1944	明治七七	大正二八
2057	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1945	明治七八	大正二九
2058	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1946	明治七九	大正三〇
2059	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1947	明治八〇	大正三一
2060	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1948	明治八一	大正三二
2061	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1949	明治八二	大正三三
2062	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1950	明治八三	大正三四
2063	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1951	明治八四	大正三五
2064	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1952	明治八五	大正三六
2065	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1953	明治八六	大正三七
2066	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1954	明治八七	大正三八
2067	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1955	明治八八	大正三九
2068	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1956	明治八九	大正四〇
2069	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1957	明治九〇	大正四一
2070	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1958	明治九一	大正四二
2071	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1959	明治九二	大正四三
2072	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1960	明治九三	大正四四
2073	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1961	明治九四	大正四五
2074	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1962	明治九五	大正四六
2075	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1963	明治九六	大正四七
2076	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1964	明治九七	大正四八
2077	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1965	明治九八	大正四九
2078	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1966	明治九九	大正五〇
2079	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1967	明治一〇〇	大正五一
2080	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1968	明治一〇一	大正五二
2081	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1969	明治一〇二	大正五三
2082	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1970	明治一〇三	大正五四
2083	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1971	明治一〇四	大正五五
2084	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1972	明治一〇五	大正五六
2085	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1973	明治一〇六	大正五七
2086	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1974	明治一〇七	大正五八
2087	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1975	明治一〇八	大正五九
2088	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1976	明治一〇九	大正六〇
2089	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1977	明治一〇一〇	大正六一
2090	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1978	明治一〇一一	大正六二
2091	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1979	明治一〇一二	大正六三
2092	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1980	明治一〇一三	大正六四
2093	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1981	明治一〇一四	大正六五
2094	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1982	明治一〇一五	大正六六
2095	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1983	明治一〇一六	大正六七
2096	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1984	明治一〇一七	大正六八
2097	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1985	明治一〇一八	大正六九
2098	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1986	明治一〇一九	大正七〇
2099	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1987	明治一〇二〇	大正七一
2100	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1988	明治一〇二一	大正七二
2101	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1989	明治一〇二二	大正七三
2102	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1990	明治一〇二三	大正七四
2103	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1991	明治一〇二四	大正七五
2104	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1992	明治一〇二五	大正七六
2105	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1993	明治一〇二六	大正七七
2106	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1994	明治一〇二七	大正七八
2107	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1995	明治一〇二八	大正七九
2108	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1996	明治一〇二九	大正八〇
2109	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1997	明治一〇三〇	大正八一
2110	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1998	明治一〇三一	大正八二
2111	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	1999	明治一〇三二	大正八三
2112	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2000	明治一〇三三	大正八四
2113	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2001	明治一〇三四	大正八五
2114	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2002	明治一〇三五	大正八六
2115	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2003	明治一〇三六	大正八七
2116	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2004	明治一〇三七	大正八八
2117	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2005	明治一〇三八	大正八九
2118	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2006	明治一〇三九	大正九〇
2119	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2007	明治一〇四〇	大正九一
2120	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2008	明治一〇四一	大正九二
2121	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2009	明治一〇四二	大正九三
2122	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2010	明治一〇四三	大正九四
2123	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2011	明治一〇四四	大正九五
2124	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2012	明治一〇四五	大正九六
2125	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2013	明治一〇四六	大正九七
2126	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2014	明治一〇四七	大正九八
2127	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2015	明治一〇四八	大正九九
2128	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2016	明治一〇四九	大正一〇〇
2129	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2017	明治一〇五〇	大正一〇一
2130	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2018	明治一〇五一	大正一〇二
2131	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2019	明治一〇五二	大正一〇三
2132	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2020	明治一〇五三	大正一〇四
2133	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2021	明治一〇五四	大正一〇五
2134	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2022	明治一〇五五	大正一〇六
2135	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2023	明治一〇五六	大正一〇七
2136	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2024	明治一〇五七	大正一〇八
2137	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2025	明治一〇五八	大正一〇九
2138	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2026	明治一〇五九	大正一〇一〇
2139	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2027	明治一〇六〇	大正一〇一一
2140	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2028	明治一〇六一	大正一〇一二
2141	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2029	明治一〇六二	大正一〇一三
2142	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2030	明治一〇六三	大正一〇一四
2143	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2031	明治一〇六四	大正一〇一五
2144	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2032	明治一〇六五	大正一〇一六
2145	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2033	明治一〇六六	大正一〇一七
2146	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2034	明治一〇六七	大正一〇一八
2147	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2035	明治一〇六八	大正一〇一九
2148	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2036	明治一〇六九	大正一〇二〇
2149	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2037	明治一〇七〇	大正一〇二一
2150	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2038	明治一〇七一	大正一〇二二
2151	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2039	明治一〇七二	大正一〇二三
2152	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2040	明治一〇七三	大正一〇二四
2153	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2041	明治一〇七四	大正一〇二五
2154	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2042	明治一〇七五	大正一〇二六
2155	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2043	明治一〇七六	大正一〇二七
2156	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2044	明治一〇七七	大正一〇二八
2157	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2045	明治一〇七八	大正一〇二九
2158	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2046	明治一〇七九	大正一〇三〇
2159	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2047	明治一〇八〇	大正一〇三一
2160	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2048	明治一〇八一	大正一〇三二
2161	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2049	明治一〇八二	大正一〇三三
2162	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2050	明治一〇八三	大正一〇三四
2163	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2051	明治一〇八四	大正一〇三五
2164	明治八	明治八	半田銀山史跡公園整備完了	2052	明治一〇八五	大

6	62	中井閑民「蚕種名鑑」	桑折町
	63	郡是製糸工場	谷地 鈴木三元氏提供
	64	大正時代の桑折本町通り	北町 角田藤二郎氏提供
	65	畜牛改良組合のせり市	伊達郡畜産農業協同組合連合会提供
	66	初代鈴木三元	谷地 鈴木三元氏提供
	66	三元車	トヨタテクノミュージアム所蔵
	67	鈴木三元の日誌	大阪 日本自転車振興会提供
	69	昭和初期ころの桑折駅前通り	北町 今井賢一氏提供
	70	信達軌道機関車	上郡 大槻一雄氏提供
	70	信達軌道路線図	平沢 佐藤茂夫氏蔵
	71	桑折町案内図	桑折町
	72	温泉通り	桑折町
	72	当時の桑折温泉	桑折町
7	74	絵馬 田村將軍蝦夷退治図	観音寺所蔵
	76	伊達稗宗肖像	仙台市博物館所蔵
	77	古河善兵衛	福島市 康善寺蔵
	77	佐藤新右衛門	福島市 岸波利郎氏蔵
	78	無能上人像	無能寺蔵
	81	高田菊太郎の墓	撮影：猪俣好巳
	86	佐藤馬耳肖像	北町 栗花マサ氏蔵
	91	「葛松原和歌集」	松原寺所蔵
8	104	桑折小学校 学知寮のあとの専用校舎	桑折町
	104	伊達崎小学校	桑折町
	104	睦合小学校	桑折町
	105	龍眼木があったころの半田醸芳小学校	半田醸芳小学校
	105	昭和 35 ～ 40 年頃の醸芳中学校	桑折町
	107	「街道まつり」	撮影：渋谷浩一
	107	復元された追分	撮影：渋谷浩一
	108	左が現存、右が復元の三元車	撮影：渋谷浩一
	109	三元車の復元図	桑折町／作成：日本大学理工学部
	110	竹灯籠まつり	撮影：渋谷浩一
	110	やわらかな光を放つ竹灯籠	撮影：渋谷浩一

掲載図版

下記以外の写真の撮影は、すべて渡邊信夫

章	頁	図版名	所有者・権利者
1	11	かつての流路の跡がわかる阿武隈川	桑折町
	13	平林遺跡出土の石器	福島県教育委員会蔵
	13	薩摩遺跡出土の土偶	桑折町
	14	錦木塚古墳全体図	桑折町
	15	桑折の断面模式図	本冊子のために作成
2	24	寺西封元肖像	塙町 泰太一郎氏蔵
3	28	谷文晁「半田銀山之図」	種徳美術館所蔵
	30	銀山精錬絵	桑折町
	31	半田銀山之全図	北半田 石川英子氏蔵
	31	木戸孝允の揮毫による「醸芳」	桑折醸芳小学校蔵
	34	亀甲積の工法を用いた「亀張水路」	撮影：渋谷浩一
	34	銀山坑口	北半田 石川英子氏蔵
	35	福島県下で最初の水力発電所	桑折町
	37	桑折角田書店発行の絵はがき（2点）	桑折角田書店発行
4	40	奥州・羽州街道行路図	本冊子のために作成
	42	「商家高名鑑」	福島県歴史資料館所蔵
	43	大字上郡文書 寛政六年九月 桑折村絵図	桑折町
	44	陣屋・本陣位置図	吉田光男氏提供
	45	本陣図	北町 栗花マサ氏蔵
	45	「金草鞋 桑折」	二本松市 酒井吉夫氏蔵
	46	大字上郡文書 元禄十四年八月上郡村絵図	桑折町
	48	上郡河岸場	桑折町
	49	廻米御用鑑札	伊達崎 後藤重二氏蔵
	49	城米輸送の旗	福島市史
	49	御城米仕上帳	伊達崎 後藤重二氏蔵
	50	福島県岩代国福島町信夫橋真景ノ図	福島県立図書館所蔵
5	52	穴戸左行筆「西根堰開鑿之図」	伊達西根堰土地改良区提供
	53	西根堰	伊達西根堰土地改良区提供
6	60	伊達郡役所開所式	北町 遠藤文雄氏提供
	60	伊達郡役所正面図	財団法人文化財建造物保存技術協会提供
	61	福島県伊達郡養蚕場地理案内	上郡 大槻一雄氏蔵

■創立 20 周年記念誌 追分の歴史をさぐる

平成 14 年 11 月発行 猪俣好巳著 追分長寿会 20 周年記念実行委員会

■素人が探した落ち葉の下の歴史 半田山 沼 銀山跡 猪俣好巳著

■走れ幻の三元車

1998 年 12 月発行 猪俣好巳著 桑折町・桑折町飛翔 21 委員会

■わが町の祇園ばやし 平成 4 年 3 月 31 日発行 猪俣好巳著 桑折町

■高田家井戸堀の父祖のあゆみ 加藤倫子

■伊達郡畜連史 平成 3 年 12 月発行

「伊達郡畜連史」編集委員会 伊達郡畜産農業協同組合連合会発行

■教育施設全面改築記念誌 未来を拓く

桑折町立半田釀芳小学校教育施設充実規制同盟会

■安齋惟長の愛宕山算額 平山諦

■伊達郡誌 大正 12 年発行 伊達郡役所

■伊達郡村誌 皇国地誌編纂事業

明治 12 年頃 福島県から明治政府への報告書

■奥州街道八丁目宿 平成 13 年発行 松川町文化財保存会

■阿武隈川の歴史と文化 平成 9 年発行 阿武隈川サミット実行委員会

■奥州街道歴史探訪・全宿駅ガイド

2000 年 12 月 10 日発行 無明舎出版編集・発行

■臨時増刊 歴史と旅 日本街道総覧 古道を訪ね日本列島を東へ西へ！！

昭和 62 年発行 今井金吾・稲垣史生他著 秋田書店

■歴春ふくしま文庫 61 阿武隈川の舟運

2005 年 5 月 27 日発行 竹川重男著 歴史春秋出版株式会社

■歴春ふくしま文庫 60 街道・宿駅・助郷

2003 年 4 月 10 日発行 丸井佳寿子著 歴史春秋出版株式会社

■歴春ふくしま文庫 89 おくのほそ道を歩く

2003 年 10 月 10 日発行 田口恵子著 歴史春秋出版株式会社

■歴春ふくしま文庫 38 ふくしま食の民俗

2005 年 1 月 5 日発行 近藤榮昭・平出美穂子著 歴史春秋出版株式会社

■角川日本地名大辞典 7 福島県 昭和 56 年 3 月 8 日発行

「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三編 株式会社角川書店

参考資料

- 桑折町史 第1巻 通史編Ⅰ「原始・古代・中世・近世（1）」
平成14年9月27日発行 桑折町史編纂委員会編 桑折町史出版委員会
- 桑折町史 第2巻 通史編Ⅱ「近世（2）・近代・現代」
平成17年3月31日発行 桑折町史編纂委員会編 桑折町史出版委員会
- 桑折町史 第3巻 各論編「民俗・旧町村沿革」
平成元年3月31日発行 桑折町史編纂委員会編 桑折町史出版委員会
- 桑折町史 第4巻 資料編Ⅰ「考古資料・文化史料」
平成10年9月30日発行 桑折町史編纂委員会編 桑折町史出版委員会
- 桑折町史 第5巻 資料編Ⅱ「古代・中世・近世史料」
昭和62年3月31日発行 桑折町史編纂委員会編 桑折町史出版委員会
- 桑折町史 第6巻 資料編Ⅲ「近世史料」
平成4年12月25日発行 桑折町史編纂委員会編 桑折町史出版委員会
- 桑折町史 第7巻 資料編Ⅳ「近代史料」
平成3年1月31日発行 桑折町史編纂委員会編 桑折町史出版委員会
- 桑折町史 第8巻 資料編Ⅴ「近代・現代史料」
平成8年3月29日発行 桑折町史編纂委員会編 桑折町史出版委員会
- 桑折町史 第9巻 資料編Ⅵ「半田銀山」
平成6年10月25日発行 桑折町史編纂委員会編 桑折町史出版委員会
- 目で見える桑折町の歴史（桑折町史 別巻）
昭和60年11月3日発行 桑折町史編纂委員会編 桑折町史出版委員会
- 桑折町史叢書 第7集 半田銀山調査報告書 桑折町史編纂委員会編
- 桑折町誌 昭和44年10月20日発行 桑折町教育委員会編 桑折町
- 桑折歴史散歩―桑折町の文化財― 1992年発行 桑折町教育委員会編集・発行
- 皇紀二千六百年記念 桑折町郷土誌
昭和15年1月1日発行 福島県伊達郡桑折釐芳尋常高等小学校
- 桑折町教育 昭和5年10月30日発行 桑折町教育会発行
- 蘇る半田山 89 治山事業と森林づくりのあゆみ 福島県福島林業事務所発行
- 半田山の歴史 昭和60年発行 佐藤次郎
- 発掘世界遺産石見銀山 内田晃
- 西根堰の歴史 昭和45年7月1日発行 千葉清著 伊達西根堰土地改良区
- 桑折ことば むかしばなし 桑折町文化記念館発行

ご協力いただいたみなさま

桑折・半田・伊達崎・睦合の各地区のみなさん

桑折町立釀芳中学校の生徒のみなさん（蔵のまち桑折）

桑折町女性団体連絡協議会のみなさん（食文化）

大安寺・伝来寺・無能寺・妙蔵寺・松原寺・法円寺

諏訪神社・益子神社

伊達西根堰土地改良区

桑折町地域整備課・生涯学習課

桑折学部会メンバー

執筆の数字は、本文の1～40の番号

石岡 恒憲

執筆：32-36, 38-40 / 昭和 20 年生まれ

元 釀芳小学校校長、現 桑折・睦合公民館長

猪俣 好巳

執筆：21-26, 28, 29（伊達稗宗 / 蓬田半左衛門 / 安齋惟長 / 高田菊太郎），30, 37

昭和 4 年生まれ / 元 半田釀芳小学校校長、現 桑折町老人クラブ連合会会長

川名 静子

執筆：36 / 昭和 23 年生まれ / 桑折町議会議員

桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会副会長、桑折町女性団体連絡協議会庶務

佐藤 善治

執筆：10-14, 29（赤頭太郎） / 昭和 9 年生まれ

桑折町文化財保存会会長、桑折町社会福祉協議会理事

渋谷 浩一

執筆：19-20, 29（古河善兵衛と佐藤新右衛門） / 昭和 35 年生まれ

桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会副会長、桑折町商工会副会長

吉田 光男

執筆：8, 15-18, 27 / 昭和 10 年生まれ / 土地家屋調査士

桑折町郷土史研究会員、桑折町文化財保存会会員

渡邊 信夫

執筆：1～7, 9, 29（無能上人・矢吹琳堂），31 / 昭和 7 年生まれ / 写真家

桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会 桑折学部会長

現在の所属役職等は平成 22 年 2 月現在

『桑折学のすすめ ～ 郷土愛を育むために』の編纂を終えて

ほかの地域にまねのできないことは、地域の歴史と人である――。

『桑折学のすすめ』は、このような考えのもとに私たちのまち桑折の歴史や人を訪ね、これからのまちづくりに資するテキストを編纂しようと集まった有志8名が、3年間にわたって町の歴史をひもとき、地域の方々の話に耳を傾け、「桑折学」の入門編としてとりまとめたものです。

この冊子は、福島県の支援を受けて発刊することができました。3年間にわたってご指導くださった福島県には、大変感謝しております。

東京工業大学名誉教授の中村良夫先生には、アドバイザーとして、大局的視点からご指導、ご助言をいただき、また巻頭言をお寄せいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

また、ヒアリングにご協力いただいた町内各地区のみなさま、町内の寺社関係のみなさま、大変ありがとうございました。編集会議のお世話や調査、資料収集のお手伝いなどをしてくださった桑折町役場の地域整備課のみなさま、大変ありがとうございました。冊子編集をサポートしてくださった株式会社プランニングネットワークのみなさんにも、お礼を言いたいと思います。

「桑折学」は、冊子にまとめたことがゴールではありません。まずは、これからの桑折町を担う子どもたち、そしてその子どもたちを支える大人たちが『桑折学のすすめ』を熟読し、自分たちのまち桑折がどのようなまちであるかを知っていただきたいのです。そして、一人ひとりがそれぞれにできることから、新たなまちづくりの歩みを始めてほしいのです。それが、私たちの責務であると受け止めております。

最後に、本冊子発刊のためにご尽力くださった桑折学部会長の渡邊信夫氏、部会員の佐藤善治氏、猪俣好巳氏、吉田光男氏、石岡恒憲氏、渋谷浩一氏、川名静子氏への感謝の気持ちは、書き尽くしようもありません。蓄積された知力をフル活用し、調査、執筆、撮影などの労力を惜しまず、通算25回もの編集会議を経て、この冊子に「桑折学」を凝縮させてくださいました。

こうしてできあがったのが、『桑折学のすすめ』です。この冊子をこれから活用していただくであろう、全桑折町民のみなさまにも感謝の意を表します。

平成22年2月

桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会 会長 畠腹桂子

あとがきにかえて

県北地域は、福島県の北部に位置し、行政、教育・文化、商業、金融、医療などの高次都市機能の集積がみられ、本県の政治や教育の中心的役割を担っています。

一方、中心市街地の空洞化や中山間地域の人口減少・高齢化、地域産業の停滞が顕著であり、地域の持続的な発展を図る上で課題が多いのも現状です。

このような中、当事務所では、多彩な風土や観光資源、地域資源等の活用による持続的成長が可能な地域づくりを目指し、平成16年度から桑折町などにおいて「元気ふくしま、地域づくり・交流促進事業」を進めてまいりました。

「桑折学のすすめ」は、その一環として平成19年度から編纂作業に着手し、3年間にわたる調査と議論を経て完成に至ったところです。本書は、地域住民の方々に桑折町特有の地域資源、歴史や文化などを再認識していただき、郷土愛を育み地域力を高めることで地域（まち）づくりをさらに活発化していこうとするものです。

現在、「桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会」が中心になり、「住んでよし、訪れてよし」の地域（まち）づくりを進めています。本書がそれらの活動に重要な役割を担っていくものと期待を寄せているところです。また、宿場町としての奥州街道（県道）の道づくりや産ヶ沢川の活用などへの指針としても大いに役立てていただきたいと考えております。

結びに、本書をまとめ上げた桑折学会の8人の情熱に心から敬意を表するとともに、本書が桑折町の益々の発展の礎になることをご祈念いたします。

平成22年2月 福島県県北建設事務所

『桑折学のすすめ ～郷土愛を育むために』

平成22年2月26日 発行（非売品）

平成29年2月28日 第一版第二刷（非売品）

■編著 桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会桑折学会

事務局 桑折町役場 地域整備課

〒969-1692 福島県伊達郡桑折町字東大隅18番地 TEL 024-582-2127

■発行 福島県 県北建設事務所 企画管理部 企画調査課

〒960-8670 福島県福島市杉妻町2-16 福島県庁北庁舎6階 TEL 024-521-2514

■編集協力 株式会社プランニングネットワーク

- 1 桑折町の自然と古代から続く営み
- 2 伊達家・上杉家・幕領と桑折の発展
- 3 半田銀山 千百年の栄枯盛衰
- 4 街道と舟運を活かした桑折宿
- 5 土木遺産 西根堰と水路網の魅力
- 6 旧伊達郡役所と桑折の近代化
- 7 桑折を愛した人々
- 8 暮らしの知恵と文化・風習

- 1 桑折町の自然と古代から続く営み
- 2 伊達家・上杉家・幕領と桑折の発展
- 3 半田銀山 千百年の栄枯盛衰
- 4 街道と舟運を活かした桑折宿
- 5 土木遺産 西根堰と水路網の魅力
- 6 旧伊達郡役所と桑折の近代化
- 7 桑折を愛した人々
- 8 暮らしの知恵と文化・風習

